



325
173



始



序 説

信仰は道德に超越せざる可らず、苟くも道德に
 拘束せられむか、信仰の生命此に涸死し、靈活の
 力用終に生動するに由なし。滔天の罪惡も、信仰
 の前に救濟せられ、焦爛の苦惱も、大悲の前に解
 脱せらる。是れ實に信仰の妙用にして、人生心靈
 の上に尊嚴なる威徳を有する所以なり。されど信
 仰は道德に反對すべき者に非ず、寧ろこれを助長
 すべき者なり。然るに世の人、動もすれば二者の
 關係に惑ひ、或者は道德を無視し、或者は道德に
 拘束せられむとす。道德を無視するの極は、奔放

序 説

内交

自恣、自から罪惡に陥り、更に反省するを知らず得々之を人に誇稱し、以て自由の信仰なりと云ふ誤まれるの甚しき者と謂ふ可し。また道德に拘束せられたる者は、遲疑屈曲、伸びんと欲して伸ぶる能はず、徒に自己の胸中を顧み、一波一瀾の動く毎に、如來の救濟を疑ひ、一日も精神の平和を得る能はず。此二人の者の爲す所皆誤れり。夫れ超越と反對とは、其言相似たりと雖も、其意大に異れり。反對の言は、信仰と道德と全く相反することを意味し、超越の言は、信仰の道德に束縛せられざるを意味す。既に束縛せられざるが故に、

二

滔天の罪惡も之を許容し、必らず如來の救濟に預かることを信ず。また道德に反對せざるが故に、思念の動く所、常に我が罪惡を懺悔し、努めて道德の徑路に由らむとす。予は此種の信仰の、絶好の標本として、清澤先生の信仰を稱推す。近時の宗教界に於て、罪惡を許容したること、先生に過ぎたるはなし。故に先生は、自己の信仰に名稱を附し、惡人の宗教と稱したりき。而して其行ふ處を見るに、道に合し德に稱ひ、克己復禮の聖言を履むこと、先生の如きは蓋し少れなり。

予曾て友人佐々木月樵兄と、眞宗の聖教に就て

竊かに評隲する所あり。君曰く、安心決定鈔は哲理を含めり、故に理性の人は、之に由て信仰に入り易しと雖も、絶對の安心を得るは蓋し容易の業にあらず。歎異鈔は、眞宗安心の骨目、罪惡海中の燈火なり。如何なる苦惱の人と雖も、一たび之を心讀せんか、萬里一往、直ちに如來救濟の手に接するを得可（いかに）誠（まこと）に是れ奇特最勝の妙典なり、末弟復た言の加ふべき無し。若し夫れ蓮如上人の御一代記聞書に至ては、悠々自適、眞情の流露する所、直ちに人の肺腑を衝き、如來慈光の前に俯伏せしむ。若し其叙述に至ては、信仰に偏せず、

何れも心に受くる由に進入を心讀せんか、萬里一往、直ちに如來救濟の手に接するを得可（いかに）誠（まこと）に是れ奇特最勝の妙典なり、末弟復た言の加ふべき無し。若し夫れ蓮如上人の御一代記聞書に至ては、悠々自適、眞情の流露する所、直ちに人の肺腑を衝き、如來慈光の前に俯伏せしむ。若し其叙述に至ては、信仰に偏せず、

道德に縛せられず、信仰の中に道德の花あり、道德の中に信仰の月あり。三百十六條、煙波渺茫として際涯を知らず。信仰の書にして又實に修養の書なり。取捨は人の好む所に任すと雖も、予は其れ此聖典に従はん乎と。予竊かに其言に服し、今に至て懐に忘るゝ能はず。此指針に由て此聖典を繙くに、益君の言の信然なるを覺ふ。而して道德と信仰の關係に至ては、眞にこれ不即不離にして靈活なる信念の妙用紙上に充滿す。曩に所謂る道德を超越し、而かも之に反對せざるの信仰とは、實にこの三百十六條の教ふ所に非ずや。

明治四十三年二月、予、常盤青年會に於て、始めて此聖典を講じ、會員諸子と共に、信仰の徑路を進まんことを希求し。爾來三年の星霜を経て、講を重ぬる事二十回に及べり。三百十六條、一々是を講ずるに暇あらず、たゞ崑山の片玉を拾ふに過ぎざるのみ。若し其れ會員諸子の精神上に於て少許だも得る所あらば、一に是れ中興上人の賜物なり。此に謹んで上人の御前に感謝の意を致し、會員諸子と共に、永く上人の御遺訓に由らむこと之を序と爲す。

大正元年十一月二十五日

安藤州一誌

蓮如上人御一代記聞書講話

安藤州一

第一回 道德念佛まふさるべし

一。人の眞情といふものは、嚴格な話の時よりも、打明け話の時に、却て善く流露するものである。眞情の流露する所には、必ず精神上の感化がある。そこで古へから、大宗教育家、大教育者と云はれたほどの人は、皆燕居茶談の間に、子弟を薰育いたしたものである。ソクラテスが當時の青年を感化したのも、ユビクテ

タスが其子弟を薫育したのも、多くは燕居茶談の間に致したといふ事である。淡窓先生の御話に、自分は少年の時、筑前の龜井南溟先生の門に遊んで居たが、師匠より受けた感化は、見臺の前の御話よりも、茶煙繩床の間の坐談に因るものが多々である。先生の坐談が、知らず識らず肺腑に浸みこんで、終に一生の見識を定めることが出来たと申して居ります。近來の事で申せば、清澤先生の教育法が其である。先生の御話は、講演上のものよりも、澁茶と煎餅との間に致されたものが、今日青年の間に感化を遺して居るのである。私は清澤先生から、講演も承はりましたが、是等にはあまり記憶して居りませぬ。然かし坐談の中に承つた事が、今に精神上に痕跡を留めて、益を蒙むつたことが少なくないやうに

思ひます。そこで古人の真情に接せんとするには、其坐談の記録したるものを讀むのが尤も大切であります。

二。御一代聞書、三百十六箇條の御話は、蓮如上人の坐談である。高座の上の御話でなくて、一人一人と膝を突き合せての御話である。そこで此三百十六箇條の中には、上人が御法話をいたされて、御うれしさの餘り、涙を流させられたといふ様な記事は、幾所にも出て居る。之を拜讀して行けば、山科御堂の御居間に参つて、上人の御警咳に接する心持がいたします。私は、昨年の十一月廿三日、即ち祖師の報恩講中に、師友五六人と共に、山科御堂に参詣いたし、満庭雲の如く亂れたる銀杏の落葉を踏んで、静かに上人の靈跡を拜し、門を出て南に歩み、雜樹森森たる小邱の

前にて、上人の墳墓に拜禮をどげ、更に南に歩みて勸修寺村を過き、尙南に進んで、日野の里に、祖師聖人御誕生の靈跡を拜して一日の清遊の中に、少からぬ靈感を湧起したことでありました。然かし今日山科御堂に参詣いたしても、唯其遺跡こそ存在すれ、上人の御化導は、己に四百年前の昔の事と成て居る。松籟水聲は聴くことが出来ても、上人の御警咳に接することは出来ぬ。然るに此御一代聞書を拜讀して行くに、上人の御居間の話もあれば、廊下の上の御話もある。人の信心よろこぶ姿を見て、老の皺をのばさせられる有様もあれば、御同行の安心を聴いて、喜びの涙を流させられる御姿もある。蓮如上人は、この御一代聞書の中に、安心決定鈔を拜讀すれば、黄金の山を掘るが如しと仰せられました

たが、此御言は、やがて御一代聞書の上に移すことが出来る、即ちこの御一代聞書に就て、上人の坐談を聴聞して行くのは、實に黄金の山を掘る如しと云ふことが出来ます。

三、この御一代聞書といふ御聖教は、上人の御實子、實悟尊老と申す御方の、御緝めなされたこの事でありましたが、御話の御對手は色々の人があります。上人の御嫡男實如上人の御話もあれば御弟子空善坊、法敬坊、慶開坊など申す人の御話もある。それ等の人の直話を、實悟尊老が御緝めになつたものが、御一代聞書、三百十六箇條であります。法敬坊と申す御方は、御名を願誓と云はれた人で、これから後に、追々この人の直話が出る事でありま

六
まんで御話しいたす事となりました。いかに御聖教が尊くても、
いかに御教化がありがたくても、聴く人の方が、精神をこめてき
かねば、折角の蓮如上人の御話も、終に水の泡と消ゆるやうな次
第で、誠に残念な事と申さねばなりません。蓮如上人が、「おどろ
かすかひこそなけれ村雀、耳なれぬれば鳴子にぞのる」この古歌
を引かれて、如來の御慈悲を聴聞するのに、耳なれ雀の人が多い
と御歎きになつたと申すことも、實はこの御一代聞書の中に出て
居る御話であります。耳なれ雀の御訓誡を聴きながら、耳なれ雀
になつては、誠に恐れ多い事でありませう。今晚は、先づ第一條の
御話を拜讀いたして、四百年已前の山科御堂に於ける、正月元日
の有様を偲ばせて戴く事といたします。

一。勸修寺村の道徳、明應二年正月一日に、御
前へまいりたるに、蓮如上人おほせられさふら
ふ。道徳はいくつになるぞ。道徳念佛まふさる
べし。自力の念佛といふは、念佛おほくまふし
て、佛にまいらせ、このまふしたる功德にて、
佛のたすけたまはんするやうにおもふて、さな
ふるなり。他力といふは、彌陀をたのむ一念の
おこるさき、やがて御たすけにあづかるなり。
その、ち念佛まふすは、御たすけありたる、あ
りがたさく、ごおもふこゝろをよろこびて、南
無阿彌陀佛に自力をくはへざるこゝろなり。さ

れば他力とは、他の方らといふこゝろなり。この一念、臨終までこほりて往生するなりと、おほせられさふらふなり。

四。明應二年と申せば、足利將軍十代目の、義植公の時代でありまして、日本の歴史に名高ひ、應仁の亂の結末から、僅か十七年の後であります。此時蓮如上人は、越前地方の御化導を終つて山科御堂に御隠居あそばされて御座つたので、御歳七十九歳と申すことでもあります。勸修寺村は、先刻申した通りに、山科御堂からは、僅か二十丁ばかり南手の村で、勸修寺と申す古い御寺があります、そこで村の名も、勸修寺村と申すものと見えます。道徳と申す人は、確かには分りませぬが、在家の身ではあるけれど、

佛法に歸した爲めに、髪をおろして禪門と成て居られた人で、蓮如上人に隨喜して、念佛申された人と見えます。この道徳が、明應二年の正月一日に、山科御堂に參つて、上人の御前へ出で、元日の御禮を申し上げると、上人は世間話に移らずに、直ちに御慈悲の話に移らせられて、老少不定の娑婆であれば、誰れの人も油断はならぬが、年老いた身分は、別して後生の大事をおろそかにしてはならぬ。我が身は已に七十九歳に成つたが、道徳は今年でいくつになつたか。年を一つ加へたについても、念佛申すことを忘れてはならぬぞと、新年の御禮について、御慈悲の話となつたのが、此始めの一條であります。御文を聴聞いたした人は、必ず覺へて御座るであります。大阪建立の御文に、「あはれく、存

命のうちに、みな／＼信心決定あれかしと、朝夕おもひはんべり
まことに宿善まかせとはいひながら、述懐のこゝろしばらくもや
むことなし」と仰せられています。御信心をいたいくことは、
宿善ごとであるから、我が力で、急に何ともいたし方がないが、
然かし我が存命の中に、何卒信心決定して呉れよと仰せられる。
其切なる思召のほどは、御文の上で充分に戴けますが、この御一
代聞書と引き合せて見れば、正月元日の御禮から、早や御信心の
御話に移らせられて、いかに諸人の往生の大事を、御心にかけれ
れたかと申すことが、尤もよく伺はれる事であります。
先日、陸中の人で、道を求められる青年が、私の許に書面を寄
せて、信心の上に就て、色々の質問をいたして参りました。其御

話によると、人世に於て色々の苦悶に出遇ひ、早く安心を得たい
と思ふて、清澤先生の著書を読讀し、色々と苦辛修養する中に、
多大の感化は受けなければ、最後の安心に到着せられぬ。然るに
よく考へて見れば、他力眞宗の御法は、いかなる愚夫愚婦でも、
安心が出来ること聞いて居るから、此上は、他力眞宗の法門を聞て
安心して見ようと決心して、修養問題は暫く置いて、他力念佛の
方に耳を傾くる事にいたしました。其念佛は、何遍稱へたならば、
往生が定まるのであるかとの御尋ねでありました。極めて無邪氣
な御尋ねのやうであるが、それが苦辛慘憺の上の、力一杯の御尋
ねであるから、誠にたのもしい事でありませう。また先日、教育に
従事して居る一青年が、私に尋ねて申すには、佛智の不思議を信

じて、往生の定まると云ふは誠に難有いが、其信決定の上は、念佛申す必要がないやうに思はれる。已に往生定まつた上に、尙念佛申すといふは、御飯が出来て居るのに、まだ薪をもやすやうに思はれるこの御尋ねでありました、此疑問も亦適切な御尋ねであります。今この御一代問書の御化導は、この二種の疑問に對しての、特別の御諭しのやうに思はれます。そこが、自力念佛と他力念佛との分れめで、自力の思想から申せば、念佛稱へた力で、往生するやうに思ふから、何遍申せばよいのであるかとの疑問が起ります。他力の上の念佛は、自分で念佛申し乍ら、我が力にて申すのではない。祖師聖人は、「念佛一遍にても、我が力にて申させ候は、いこそ弟子にても候はめ。ひとへに彌陀の御催しにあづかつ

て、念佛申す人を、我が弟子と申すことは、誠に恐れ多い次第ぢや」と申されてあります。自分の力で申すものならば、信心決定以後、往生治定の上は、念佛申さいでもよいかとの議論も起りませうが、念佛一遍にても、彌陀の御催しにあづかつて申すこと故私の方にて、申すとか申さぬとか、そんな事を定むべきものではないのであります。今の二人の青年の疑問を、蓮如上人が、四百年以前に御存知の上で、かねて御化導を遺して下されたやうに、この第一條の御化導が適切であります。

五。道德に對しての、自力他力の念佛の御話が、直ちに今の疑問の解答になるのである。道德よ、年の老い行くにつけても、念佛申すことを忘るなよ、その中でも、自力の念佛といふは、誠に

心苦しく、胸の晴れわたらぬ念佛で、佛智の不思議も信せず、六字の不思議も信せず、自分の腕の力を恃みにして、我が稱へた功力にて、佛の御たすけにあづからんとするものである。他力の念佛といふは、そんな胸の晴れぬ中からの念佛ではない。彌陀をたのむ一念に、やがて御たすけにあづかるから、其上の念佛は、往生を御定めにあづかりしことを喜んで、佛恩報謝のために申す念佛であるぞと。自力他力の水涯を、分明に御示し下されたものである。彌陀をたのむと申すことは、蓮如上人御化導の中心で、今後も度々出ることであるから、今此に一言申して置きますが、信心といふも、たのむと申すも、其意は同じことである。如來の御慈悲を信するといふも、言を換へて申せば、彌陀をたのむと云ふ

著者ハ氣盡ナカラ地獄ニ墮ル身、多クノ衆生ヲ迷ハスノ罪ヲヤルモノ、佛長罪モ徳ヒセンモノナリ。

信ハ心ヲホス
ハ知ルモノニホス
我見ヲ改メテ
佛智ヲ受ケルナリ

ことである。しかしそこは、言語で示すべきものではなくて、心の上直感すべきものである。我が身が罪の深いものぢやと気がつき、後生は大事ぢやと気がついた所に、其惡人を其儘救ふことの御慈悲を聞いた時は、後生の大事を擧げて、彌陀に御まかせ申すばかりである。其時の心もちは如何であるか、唯後生たすけ玉へば、彌陀をたのむ思ひより外はない。たのむといふ御化導を聽て自力たのみに成り易いのは、先手の御慈悲を除けておいて、自分の方からたのんでかゝるから、自力たのみになるのである。自力たのみである間は、何年聽聞しても安心することは出来ませぬ。蓮如上人の御示しになつた、自力念佛といふのが、即ち自力たのみの人である。これほど念佛を稱へるから、その功力に由てたす

け玉へと出かけるのである。是れが自力念佛自力たのみの人で、念佛申し乍ら安心の出来ぬ人である。

六。他力の彌陀をたのむといふは、彌陀の先手の呼聲をきいて御慈悲が我が胸の底に徹した時に、たのむべきは彌陀一佛、我が後生をたすけ玉ふことの難有やと、御慈悲の信せられたが、他力信心の、彌陀をたのむ味ひであります。「たのむとは、聲も言もなかりけり、すがる思ひをたのむとはいふ」とは、他力の彌陀をたのむ味ひであります。これまでは言の上のせられますが、これから上は、自分自分の心の上に、直ちに御慈悲を直感することあります。梅の香ひは、どんな香ひがいたしますかと問はれても清らかなよい香ひがいたします位は答へられるが、それより上は

直感であります。言の上で申せば、御慈悲の聞けた心の有様は、後生たすけたまへと、彌陀をたのむ思ひちやと申すより外はありませぬ。然かし蓮如上人は、「いかに不信なりとも、聽聞を心にいれ申さば、御慈悲にてさふらふあいだ、信をうべきなり、たゞ佛法は聽聞にきはまるなり」と仰せらるれば、彌陀をたのむと申す味ひも、初めの間は分らんでも、聽聞さへすれば、必らず分るやうになります。そこが御慈悲の透りて下さる所であります。

七。「南無阿彌陀佛に自力をくはへざる心なり、されば他力とは他の力らといふこゝろなり」と仰せられる所が、誠に難有い意味の存する所で、自分の力で稱へるのではなく、全く他力大行の御催しである、さればこそ他力を申すことであれ。祖師聖人が、ひ

とへに彌陀の御催しにあづかりて、念佛申すことちやと仰せられる所と、符節を合するやうによく合ふて居ります。そこで今まで自力念佛であつた人が、この他力念佛の思ひに住すると、まるで心持が變つて来て、何となく、ぼんやり難有いと云ふやうなことでなくて、御たすけにあづかりし事のありがたやと、夜の明けたやうに判然と成て参りますから、蓮如上人は御文に、「うれしさをむかしは袖につゝみけり、こよひは身にもあまりぬるかな」といへる古歌を御引きに成て、自力念佛の昔と、他力念佛の今とを比較して御示しに成つたことであります。「この一念臨終までとほりて往生する」と仰せられるは、彌陀をたのむ一念の信心が、臨終の夕まで相續する。即ち彌陀の御護りに由て相續させて下さる

から、いつでも思ひ出した時が、御たすけありつることのありがたやと、喜びの心が、口に出ては南無阿彌陀佛となるのである。一念の信心が臨終までとほるから、信心以後の念佛は、一念の信心、其體が別物ではない、其信心から光りが顯はれて南無阿彌陀佛と稱ふるのである。これが他力の念佛で、念佛一遍にても、彌陀の御催しにあづかつて申すとは此所の意味である。信心が已に他力の賜物であるから、其信心より顯れる念佛も、固より他力大行の御催促と申すことであります。この道徳に對しての御化導は誠に短かい御化導でありますが、眞宗の他力信心の骨目は、此外には出でぬことであります。私が今晚話したことは、随分長くあります、蓮如上人の、道徳へ對しての御化導は、僅かな文字の

中に、安心の肝要がおさめられてあるから、家にかへつても篤く拜讀いたしてもらいたい事であります。

第貳回 他力の願行をたもちながら

一。「論語」の中に、孔子が晏平仲と申す人をほめて、「晏平仲よく人と交はる、久しふして而して之を敬ふ」と仰せられてあります。文の意味は、別に解釋もいらぬ程に易い。晏平仲は、人と交際すること上手である、五年交はつても十年親んでも、敬ふといふことを忘れない。文の意味は唯これ丈である。しかし單にそれだけの解釋ならば、論語の意味は分つたにしても、これを實地に味ふた人ではない。實地に味はぬ己上は、眞に論語の意を解し得た

とは申されぬ。世の諺に、「論語よみの論語知らず」とあるのは此ことである。

二。凡て人間は、最初の間は、敬ひを忘れぬものであるが、月日の立つに従ふて、いつの間にも敬ひを忘れて、一寸とした口先の言り合から、三日も四日も互に物を言はぬやうになります。人に差出す書面をかくにも、最初の間は、念に念をいれて、萬一かき誤りでもすると、直ぐに巻紙を切り捨て、新たに一筆啓上から書き始めますが、中頃から終りの方になると、墨の薄いころもあれば、書き誤りもある、甚だしきに至つては、二三行位は抹殺した所もある。最後の草々頓首と、姓名の所になると、文字すら不分明になるといふのは、よく世間日常の生活に見る所であ

る。お嫁にいつた最初は、萬事慎みに慎みを重ねて、何事も丁寧である。食膳に向ふ時も、敬ふといふことを忘れては居らぬ。然るに月日が立つに従ふて、いつの間やら敬ひを忘れて、終に夫と口論を始めると云ふやうなことは、よく世間にありがちの事である。この自分自身の缺點に気がついて、論語をよみ直して見ると、晏平仲が人と交際をするのに、五年交はつても十年つき合つても、敬の一字を忘れずに居るといふのは、實に感心なことで、孔子様が御ほめになつたのは、誠に尤もな次第であると思はれます。然らば今日己後、私も晏平仲の美德を學んで、其十分の一なりとも、日々の生活に、敬の一字を心頭にかけて、師匠の前でも朋友の前でも、敬ひといふことは忘れますまいと、これを實行し

て行くやうに成た所で、初めて論語の、晏平仲の一節を學び得たと申すものである。唯文字の上だけ解釋して、晏平仲が人と交際するのに、いつも人を敬ふたそうなど、餘所事に見て居る間は、文字を知つたとは云はれるが、道を信じたとは申されぬ。

三。これもやはり、「論語」の中の御話であります。孔子様が御弟子の顔回を御ほめになつて、「怒りを遷さず、過ちを貳たびせず」と申してあります。過ちを再びせずといふことも、唯過ちを二度せぬことで、一度茶碗を取り墜して破らかしたら、よく心に覺て居て、二度と茶碗を取り墜さぬこと位に思ふて居る人があ

る。私自身が、確かにさやうに思ふて居たのである。然るに淡窓先生の御話に、人間といふものは、一度した過ちは、必らず二度

も三度も繰り返すものである。女のために身を誤まり、酒のために身を誤まる人も、最初から悪いと知らんのではない、自分ながら悪いことちやと自覺して居る。最早やこれぎり、自分の心を改めました、二度と横道には踏みこむまいと、決心する下から、再び悪道に踏み迷ふのは、實に人間の缺點である。最初から一度も過ちをせぬといふのは、さほど困難ではないが、一度した過ちを再びせぬといふのが頗る困難である。これが孔子の顔回を御ほめなされる譯である。申されました。私は幼少の時から、酒と煙草とをのみません。これは修養の結果として飲まんのではない。本來嫌ひで飲まないのである。そこで自分に苦痛とも何とも思ひません。然かし二年も三年も、酒や煙草をのんで、充分其味ひを知

り乍ら、一朝衛生に害あることを知つて、驕然として、手の掌をかへすやうに、禁酒禁煙をするのが、頗る困難なことである。御釋迦様の御弟子に對しての御化導に、人間は、執着があれば必ず苦みがある、苦惱を離れたいと思ふ者は、執着を捨てねばならぬ。されば今日より已後、我が弟子たるほどの人は、松の樹の下に一夜の宿を求めても、必ず二晩とは續けて宿を求むるなよ、二晩宿れば、松の樹の下にも執着の念が起つて、三晩も四晩も松の樹の下が戀しくなるものと御誠めになつてあります。松の樹の下ですら、執着が起り易いと申せば、酒や女のために身を誤つた人が、再び踏み迷ふてはならぬと決心する下から、いつの間にもやが決心が崩れて、同じ過ちを二度も三度も繰り返すといふ

のは、已むを得ぬとは申し乍ら、なさけない事である、此所が聖賢の深く誠めを垂れた所である。是に至て、孔子が何故に顔回を御ほめになつたか、其意味がよく分ります。そこで淡窓先生は、孔子様が顔回をほめるのに、「過ちをせず」とは仰せられず、「過ちを貳たびせず」と仰せられたは、誠に意味のあることちやと申されてあります。顔回ほどに修養を積んで、全く過ちを再びせぬといふのは、頗る至難のことではあるが、我れも顔回の美德を一分なりとも學んで、自分で悪いと自覺した事は、今日已後之を慎みませうと成た處で、眞に論語を解し得たのである。唯文字の上だけ解釋して、過ちを再びせずとは、二度と茶碗を取り墜さぬことちや位に思ふて居るのは、道を信することは愚か、文字の意義

すら、ろくに解釋が出来て居らんののである。

四。今晚、この論語の御話をいたすのは外でもないが、一は論語の意を會得して、信心決定の上には、一分なりとも、晏平仲や顔回の徳を學んで行きたいといふ希望と、今一つは、此論語の意味からして、今晚講話いたす所の、「御一代聞書」の御趣意を會得してもらひたいのであります。佛法を聽聞し、惡人往生の他力本願の御趣意を聞き乍ら、安心が出来ぬと云ふのは、唯耳先きに聞て、心に確と信せぬからである。今晚この御座敷に坐つて御座る姿が、早や如來の御慈悲の中に居る身である。深夜萬籟死して、ひとり青燈の枕を照らす時、我身の過ぎ來し方を考へて見れば、裸體にして地獄の底につき墜されても、不足の云へぬ身分である

然るに今現に御慈悲の中に包まれて、地獄にも落ちずに、このやうに膝をつき合して、御慈悲を聴聞するといふのが、それが早や容易ならぬ如來の御護りである。私の方では、この如來の恩寵を知らずに居るが、如來の方にては暫くの御忘れもなく、この罪惡の私を、一日も早く御慈悲に氣がつくやうに、色々と御育て下さることである。そこで祖師聖人は、「久遠劫よりこの世まで、あはれみましますしるしには、佛智不思議につけしめて、善惡淨穢もなかりけり」と久遠劫の昔から、御育て下された御慈悲を御喜びになつてあります。この御育てを蒙つたのは、祖師聖人御一人ではない、私共も皆同じことである。然るにこの厚い御恵みを知らずに、佛法聴聞の席に出る時だけ、御慈悲を聞かせてもらうやう

に思ふのは、大なる誤りである。三年聴聞しても五年聴聞しても、安心の出来ぬといふのは當り前のことである。顔回の「過ちを再びせぬ」といふのを聞いて、二度と茶碗を取り墜さぬこと位に思ひ、晏平仲の「久ふして之を敬ふ」と云ふのを聞いて、妙に丁寧な人であつたものぢや位に思て居る間は、道に進むことの出来ぬと同じことである。今晚此席に參詣した時だけ、御慈悲の御手に接するのではない、毎日毎晩御慈悲の御手に育てられて居るのである。我が兒に別れた人は、其哀別離苦の上に、御慈悲を喜ばねばならぬ。病苦に惱んで居る人は、其病苦の上に御慈悲を聴聞せねばならぬ。此御慈悲に氣付かぬ間は、千里も二千里も遠方に御慈悲を眺めて居るのである。久遠劫來の御育てに由つて、佛法聴聞

の出来る今の身にして戴いたと思へば、現在の此身が、御慈悲の中に包まれて居るのである。御慈悲が信せられぬとか、御恵みが見付けられぬと云ふのは、如來の御慈悲を遠方に眺めて居る人である。私一人のための御慈悲といふことが分らぬのである。此所が蓮如上人の深く御歎きになる所である。疊をたゝいても南無阿彌陀佛、衣の襟を撫でさせられても、我は南無阿彌陀佛にまゐられたるよと仰せられるのは、此現在の近き御慈悲を知らせて下されたのである。今晚御話し致す「御一代聞書」の御化導も、唯此手近い御慈悲を信せよこの御勸めより外はありませぬ。今本文を読み上げて御話を進めます。

一。他力の願行を、ひさしく身にたまちながら

よしなき自力の執心にはだされて、むなしく流轉しけるなりとさふらふを、に存せずさふらふよしまふしあげ候ふところに、仰せに、きゝわけて、ゑ信ぜぬものゝことなりと、仰せられさふらひき。

五。此の一條は、御弟子空善坊の御尋ねについての、蓮如上人の御化導である。御尋ね下された人は空善坊なれども、蓮如上人の御化導は、今晚參詣の私共に對しての御化導と思ふて、聽聞いたしたい事である。前の論語の御話と照し合すれば、この一條の御化導は、尤もよく眞意を味ふことが出来ます。文の上をざつと御話しいたせば、願行といふことは、一口に申せば、願望と實行

とである。學者に成りたいと云ふ願望があつても、苦辛勉強する所の實行がなければ、學者になることは出来ぬ。吉野山の花を見たいと云ふ願ひがあつても、實地に吉野山まで歩みを運ばねば、峯の櫻を眺むることは出来ぬ。世間一切の事、願と行とが無くては、何一つ成功することは出来ませぬ。生死を離れて佛果に至るに就て、第一に必要なものは願である。是非に佛果に至りたいと云ふ菩提心が必要である。いかにこの願があつても、實地に修行する所の行がなくては、佛果に至ることは出来ぬ。願と行とがそろつた所で、始めて生死を離れて佛果に至ることが出来るのである。然るに今日の私共は、此娑婆世界にばかり執着して、佛果を求むる所の菩提心が起らぬ。其願がないばかりでなく、毎日爲す

ことは、唯煩惱相手の仕事のみで、實地の修行などは一つも出来ぬ。そこで彌陀如來の御手許にて、願行具足の南無阿彌陀佛を御成就下されて、其名號の不思議を信する一つで、願も行も具足して、他方に牽かれて淨土往生が出来るやうに、御成就下されたのが南無阿彌陀佛である。この御慈悲を、昨日も聴聞し、今日も聴聞するのが、早や他力の願行を身に差し着けられて居るのである。然るに此手近ひ御慈悲を聴き乍ら、願行具足の南無阿彌陀佛を口に稱へ乍ら、安心が出来ぬと云ふのは、自力の執心につながれて、他力の御慈悲を信せぬからである。御慈悲を信せぬから、如來の御育ての下にあり乍ら、往生一定の思ひに住せぬのである。

六。元どこの「他力の願行をひさしく身にたもちながら、よし

なき自力の執心にはだされて、むなしく三界に流轉する」この御言は、「安心決定鈔」といふ御聖教の上に出て居る御言である。一寸聴聞いたすと、他力の願行を身にたもつて居るならば、三界に流轉する筈はないやうであるのに、他力の願行を身にたもちながらも、自力の執心にひかされて三界に流轉することは、いかなる意味でありますかと、空善坊が御尋ね申したのである。然るに蓮如上人の御仰せは、實に晴天の霹靂と申すべきか、怠眠に加わられたる鐵槌と申すべきか、唯一言の下に、それは、きゝわけて信せぬもののごとなりと仰せられたは、誠に明白な御化導でありまして、今日までうかく暮して居た私共は、何とも早や頭が上げられぬ程である。いかに御馳走を並べてあつても、それを食べね

ば腹はふくれぬ久遠劫來の御育てにあづかり、昨日も明日も、我等のために御成就下された願行具足の南無阿彌陀ちやと聴聞しながら、唯耳先ばかりに聴き流して、心の中に、確と御慈悲を信ずることがなくては、安心も出来ぬ、淨土往生は猶更ら出来ぬ、空しく三界流轉の身とならねばならぬ。秀存講師の御法話に、「彌陀をたのむと云ふは、御たすけの邪魔をせぬことぢや」と仰せられました。他力の願行を御成就下されて、いかなる悪人も女人も空手のなりで參られるやうに御計らひ下されてある。其御慈悲を聴聞して、さては私一人のための南無阿彌陀佛であつたかと、他力の御たすけに邪魔をせずに、其まゝ佛智の不思議に御まかせ申すのが、彌陀をたのむと申すものである。他力不思議に御まかせ

申した心持ちは、後生たすけ玉への思ひである。後生たすけ玉への思ひがあるから、御たすけに邪魔をせずに、其まゝ佛智の不思議に御まかせ申すのである。ごうか御慈悲を遠方に眺めずに、現在の身の上に御慈悲を味ひ、口に稱ふる南無阿彌陀佛が、願行具足の名號ちやと知られたなら、私の方には、願も行もらぬ、眞に此まゝの御たすけぞと、他力の御恵みに邪魔をせずに、御慈悲のほごを深く信じさせて頂き、信心の喜びの上には、晏平仲の生涯守られた敬の一字も、顔回の過ちを再びせぬといふことも、其百分の一なりとも實行して行きたいこととあります。今晚講話いたした所は、學問上では、大變むつかしい所でありますが、皆さんは、唯手近い御慈悲の所だけを聴聞すれば、それで充分でありますから、この位で御話を留めて置きます。

第參回 參らせ心わろし

一。「涅槃經」の中の御話によりますと、七人の子を持ちたる親は、子の可愛いと云ふ情は、七人に對して平等なれども、若しも其中に、病に惱む兒がある時は、親の御慈悲は、特に其病兒の上にあつて聚まると申すことである。實際、世の中を注意して見れば、都合な事をして、世にも親にも心配をかけるやうな者を、一層不愍に思召して、慈悲の涙を注いで下され、何とかして、この親心が我が子の胸に透つて、眞の人と成て呉れるやうにご、明け暮れ念じて下さる親の御慈悲は、到る處に其實例を見ることが出来る。

この親の御心が分つて、私如きものを、悪いとも思召さず、明け暮れ心にかけて下さるとは、何たる深遠の御慈悲ぞと、親の心が汲み得らるれば、それが第一の御恩を報ずる譯である。然るに世の中には、この親心を知らずに、私の方から御土産を持って往て、親の心を喜ばせやうとする者がある、是は大いなる誤りである。親の心が分らぬ中は、如何なる御土産を持って往つても、決して御恩報じにはならぬ。何の御土産を持たずとも、親の御心が分つて私ほどの不都合な者をも、御見棄てなされぬ御慈悲とは、何といふ尊とい親心ぞと、御慈悲のほどが分れば、それが第一に孝行となる譯である。

二、嘗て某地の監獄に教誨師を勤めて居ました人の御話に、或

時多くの罪人に向て御前さん方は、こんな不都合な身となつて、親には何として顔を合せる積りぢやと尋ねた所が、罪人どもの答へに、此上は監獄の中で充分勉強して、少しでも賃金が残つたら、それで着物の一二反も買ふて、それを親に御土産にする積りぢやと申したそうであります。しかし親の身に取ては、監獄に落ちた子供から、御土産に反物を貰ふた所が、決して御喜びはなされぬ、なんのそんな着物を着て、世の中が歩かれませう。それよりも、監獄に落ちて居る身をも御見棄てなく、一日も早く出獄するやうに、雨につけ風につけ、我が子の一身の安穩なれかしと明け暮れ念じて、慈悲の涙を注いで下さる親心を會得して、誠に相濟まぬ次第である、かほど深い御慈悲とも知らずに、御心を惱まし奉り

しことの浅間しや、此上は親の御慈悲を我が胸に納めて、再び御心配をかけぬ様にせねばならぬと。獄中生活の私の上に、日夜注いで下された御慈悲に気がつくなれば、それこそ親は満足で、一
 二反の着物地を贈つたよりも、百千倍の親孝行である。然るに監獄中の罪人は、大抵は反物位を買ふて、親への御土産にしようと思ふて居る人が多いと申すことで、親の心を子知らずとは此事である。親鸞聖人が、「まことに如來の御恩といふことをば沙汰なくして、我も人もよしあしといふことをのみ申しあへり」との御誠めは、此邊の意味合ではありますまいか。私の心の中の、善いも悪いも御承知の上で、其氣をもらし玉はぬ御慈悲であるのに、其御慈悲をば仰がずに、如來聖人の前に、御土産を持って往かふとす

るのが私共の心中である。監獄中の罪惡に汚れた賃金で、着物を二反や三反求めたとして、何のそれが親への御土産になりませう。貪欲瞋恚の罪惡に汚れた者が、何事をつとめたとして、何のそれが如來様への御土産になりませう。そんな御土産の用意をするよりも、手土産なしに、空手で来いよの御慈悲が戴かるれば、それこそ如來聖人の御本懐にかなう次第である。

三。私共が、朝夕の御勤めをいたし、正信偈や御和讃を拜讀しても、それを以て、如來聖人への御土産の如く思ふたならば、大いなる誤りである。祖師聖人が、正信偈や御和讃を御作り下されたは、唯如來の御慈悲を、手近かく戴かるゝやうにして下されたのである。七高僧の御聖教は、仲々廣漠なことで、愚かな悪人女

人が、容易に窺ひ知ることの出来ぬ所である。そこで祖師聖人は千のものを百に約め、百のものを十に約め、いかなる愚かな人も如來の御慈悲が戴かれるやうに、噛み砕いて御示し下されたが、三帖の御和讃である。然らば其御和讃を拜讀して、これも私一人のため、あれも愚かな私のため、逆悪もらさぬ誓願の御慈悲を、かほごまで手近かく御示し下されしことの難有やと、これを拜讀いたす下から、祖師聖人の御手に引かれて、如來の御慈悲を喜べば、それが即ち、如來の御心にもかなひ、また祖師聖人の御心にもかなふ次第である。然るに、その御慈悲を信することをば餘所ごとにしておいて、正信偈や御和讃を拜讀して、其御勤めを以て、如來聖人への御土産のやうに思ふのが、大いなる心得違ひぢやと

仰せらるゝ事であります。佛恩報謝と申すことも、知恩報徳と申すことも、如來の御慈悲を信じた上のごことである。肝心な御慈悲をば信せず、御勤めをいたす事を、如來聖人の方に廻向して、御土産にしよう云ふのは、獄中の罪人が、日夜我身を憐み下さる親の御慈悲をば思はず、唯自分の手前を虚飾ふて、反物を買ふて、親への御土産にしようとするのと同じである。其實は、御土産にもならず、亦親の御心にもかなはぬことである。此所までも御氣をつけて、私共の心持ちやうを御示し下されたのが、今晚御話しいたす所の、蓮如上人の御化導である。

一。十月二十八日の逮夜に、正信偈和讃をよみて佛にも聖人にも、まいらせんごおもうが、あさ

ましや。他宗にはつごめをして、廻向するなり御一流には、他力信心をよく知れと思召して、聖人の和讃に、その心をあそばされたり。ここに七高僧の御ねんごろなる御釋のこゝろを、和讃に、聞きつくるやうにあそばされて、その恩をよく／＼存知して、あらたふこやご念佛するは、佛恩の御こころを、聖人の御前にて、よろこびまうすこゝろなりと、くれ／＼仰せられさふらひき。

四 この一條には、唯十月二十八日の逮夜とあつて、何年の十月二十八日とはなけれども、一番最初の勸修寺村の道徳への御化

導が、明應二年の正月一日であり、また唯今拜讀いたした御化導の、次下の御話には、明應三年十一月、報恩講の二十四日云々であれば、前後の文から推して見て、やはり明應三年十月二十八日の御逮夜の御化導ちやと申すこととあります。二十八日の御逮夜とあるから、實際の日附けは、二十七日と思はねばならぬ。其逮夜すぎに、同行衆に對しての御化導と見えます。本文の上に、「佛にも聖人にも、まいらせんと思ふか、あさましや」とある所は、まいらせんと思ふ歟、それは大變にあさましいことぢやと、かの字を濁らすに、清音に讀むが宜しいと申すこととあります。あさましやと云ふことは、世間によく用ふる言でありますが、其語源を尋ねて見れば、よほど面白い話があります。往昔天竺に、五百

の群猿があつて、ある月夜の晩に、樹の下に聚つて、色々な遊びごとをして居りました。其時一匹の猿が、不圖其近邊の古井をのぞいて見ますと、天上の月影が映つて居る。そこで其猿は大いに驚いて、月公水に没せり、月公水に没せりと叫んで、他の群猿に知らずると、皆の猿は驚いてかけ集まりましたが、何としても之を救ふ道がない。皆思案に暮れて居ると、一匹の老猿か申すには、私に一つの思案がある、皆さんが私の云ふ通りになるならば、之を救ふは何でもないと申す。そこで群猿は、一も二もなく、其言に従ひませうと誓言をした。其時かの老猿が申すには、私が井の上の樹の枝に取りつくから、諸君は私の足にとりついて、次第次第に下るならば、井の水面に手の達くは必定であると申す。それ

は宜い思案ぢやと、早速に樹の枝から、手と足を握り合ふて、鎖のやうに下つた所が、今にも水面に達かんとする時に、樹の枝が重さに堪へかね、ポキンと折れたために、五百の猿は水中に沈んで、無惨の最後を遂げましたが、月は依然と水の上に輝いて居たといふことである。賢いやうでも、さすがは猿である、人間から見れば、まことに淺はかなことである。猿のことをましろと云ひ、略してましろと呼びます。私は先月、「靱猿」といふ狂言を見ましたが、猿廻が、猿のことを、ましろましろと呼んで居ます。そこで、あさはかなる猿の智慧といふことで、あさましやと申すことぢやと聞て居ります。

五 朝夕の勤行に、正信偈や御和讃を拜讀して、それを如來聖

人の方に廻向して、御土産にするといふ心は、賢いやうでも、其實は決して賢くない、まことに淺間しいことである。監獄に落ちた人が、反物を買ふて親の御土産にすると同じことである。綱島梁川氏の御話に、自分は、早稻田大學の講義録の原稿を書くのに、二三時間の中に、三十枚もかきあげて、極めて迅速に仕事をして居たが、胸中に御信心の光りを見つけて後は、何と書いたらば、この喜びを世間の人に傳へることが出来やうか、いかに寫したらば、この信仰の妙味を、人に示すことが出来やうかと、それを案するやうに成て後は、僅かに一篇の文章を草するにも、三十日内外の時白を費やすことに成つたので、之を思へば、親鸞聖人や蓮如上人が、愚かな者のために、如來の御慈悲が會得出来るやうに、

御言を和らげさせられた御聖教を拜讀いたす時は、幾度も之を推戴かねば相濟まぬと申されたこの事である。やはり子を持つて知る親の恩といふ風情で、自分に一篇の文章でも認めて見れば、祖師聖人の御心盡しの程が仰がれます。七高僧の廣漠なる御聖教から、その精髓をぬき出して、言やわらかに御示し下されたは、それを拜讀して、一日も早く、如來の御慈悲に氣がつくやうに、片時も早く御慈悲を戴いて、心安き生活をするやうにこそ、御心づくしの御製作であるので、決して朝夕の勤行をして、その勤行を如來に廻向して、その力で淨土に參らせて下さいと自力の勤めの道具にせよとの思召ではない。然るに祖師聖人の御心づくしの程も仰き奉らずに、自力廻向の道具にしよう云ふのは、賢いやうでも猿

の智慧と同じことで、誠に淺間しいことぢやどの御歎きである。この蓮如上人のお誠めは、唯言の上の御誠めではなく、御身を以て示させられた事である。其ことは、やはりこの「御一代聞書」の、第四條に出て居ることである。

一。御つごめのとき、順讚御わすれあり、南殿へ御かへりありて、仰せに、聖人御すゝめの和讚にあまりにく、殊勝にて、あげばをわすれたりこ、仰せさふらひき。ありがたき御すゝめを信じて、往生するひこ、すくなじご御述懐なり。

六。この御行狀から御察し申せば、蓮如上人は、朝夕の勤行に、御和讚を拜讀いたすたびに、如來の御慈悲を御喜びなされ、祖師

聖人が、これほどまでに手近く御諭し下された御親切を、深く感佩いたされたことである。順讚とあるのは、六首の御和讚を、順次に御調聲を上げることでありませう。然るに蓮如上人は、あまりに御和讚の御ころが難有く、これ程までも、手近かく如來の御慈悲を御諭し下されたと思へば、唯其御慈悲のほどが難有さに、御和讚の御調聲の順序を違へさせられたと申すことである。孔子の御言に「過ちて此に仁を知る」と申してあります。人間は表面を飾り立て、居る時は、誰が仁者か不仁者か分らぬ。思ひがけなき過ちをした時に、仁者は仁者らしい過ちが起る、そこに心の秘密がころげ出ることである。そこで眞の仁者なることが分るのである。白粉をぬり立て、居る時は、誰が美人か不美人か分らぬが、

思ひがけない時に泣き出して、涙のために白粉が褪げて來ると、眞の美人はそこに本性が現はれる。勤行をする時に、唯殊勝につとめて居る時は、誰が信心者か不信心者か分らぬが、御和讃を拜讀いたす間にも、あまりの尊さに、御調聲の順序をこりちがへると云ふので、過ちを見て此に仁を知ると申す風情に、蓮如上人の御心の尊さが窺はれる次第であります。南殿とあるのは、蓮如上人七十二歳にして、御隠居あそばされた處で、今の山科御堂から三丁ばかり南に參りますと、泉水山、光照寺と申す小さな御寺があります、蓮如上人御好みの泉水や築山の跡が残りて居ります。上人は此南の御殿に御坐らせられ、御當職の實如上人は、北殿に御坐らせられたのである。そこで御勤めの御果てなされて、南殿

の御隠居所に御歸りなされて、今日は御勤めの最中に、あまりの難有さに、御和讃の順序も忘れ、御調聲の上げばを間違へたが、さて、難有いことぢや、この難有い御すゝめを信じて、往生する人の少ないのは、誠に残念なことぢやとの御述懐である。

七、この第四條の御化導と、今晚拜讀の御化導を照し合せて見れば、別に御話もいらぬ程によく分ります。蓮如上人はあまりの難有さに、御和讃の順序を間違へさせられる。今日の我々は、ともすれば朝夕の勤行を以て、如來聖人に御土産にしやうとする。しかも一番大切な、御和讃の中の御勸め下されたこと、罪惡深重のこのなりで、我をたすけ玉ふ御慈悲を信せよとの御化導をば、白河夜船で通りぬけて仕まう。蓮如上人が、その方たちは、正信

偈和讃をよみて、佛にも聖人にもまいらせんと思ふ歟、それは誠に淺ましいことぢや、勤めをして廻向すると云ふは、自力を主とする他宗のことである、他力眞宗の御一流には、信心よりほかは何にも入らぬ。祖師聖人の御和讃も、その信心のむねを心得よとの御製作であるぞと、御誠め下された一條であります。然かも、「くれぐれ仰せられさふらひき」とあれば、恐れ多い事ながら、當年八十歳の御老體に、御齒のぬけさせられた、齒ぐきばかりの口を喰ひしめて、繰り返し／＼御話し下されたる、山科御房の、南殿のありさまが想像せられることでもあります。

第四回 往生すまじきかの疑ひ

一。清澤先生の御話に、「宗教といふものは、人心の至奥より出づる、至誠の要求のためにあるので、道徳や功名利達の爲に宗教があるのではない」と申されたことがあります。近來は、信仰を求むる人も、段々多くなりましたが、ごうも内心必然の要求から、まじめに信仰を求むる人が少ないやうである。そこで親鸞聖人や蓮如上人の御信仰を聴聞すると、何だか道理に合はぬやうな心持がする。これは畢竟、親鸞聖人や蓮如上人の御信仰を、文字の上で會得せんとするから起る誤りである。實感上の御語は、之を自己の實感に訴へて聴聞せねばならぬ。「兒を持つて知る親の恩」といふ風情で、自分の兒が、寝ても起きても忘られぬといふ實感があつて、始めて私を養育して下された親の御恩が分るのである。

今晚御話しいたさうと思ふて居る所は、學問上では、随分六つかしい所で、人によると、此一段は、猥りに講話をせぬがよい、うっかり講話をすると、異安心に陥るからと云て、わざと避けて通る所である。然かし信仰の實感上から聴聞すれば、六つかしい所ではない、これほど適切な御化導はあるまひと思はれる。若し「御一代聞書」の中に、この一條がなかつたならば、往生いかいの不審が起るかも知れぬが、この一條があるばかりに、御慈悲の程が、一層難有くいたいかれることであります。先づ其一條を讀み上げて、徐々御話を進めて参りませう。

一。仰せに、ごきく、懈怠することあるごき、往生すまじきかご、うたがひなげくものあるべ

し。しかれども、はや彌陀如來を、ひごたびたのみまいらせて、往生決定ののちなれば、懈怠おほくなるものなれども、御たすけは治定なり。ありがたやく、ごよろこぶこゝろを、他力大行の催促なりごまふすご、おほせられさふらふなり。

二。この一條の御化導は、「歎異鈔」の第九節と相並んで、凡夫往生の手鏡とも申すべき所である。いかに妄念煩惱が烈しく起つても、この一條の手鏡をとり出して、私の胸と照し合はすれば、疑ひの雲は忽ち晴れて、往生一つは、願力の不思議として間違ひないご、現在安住の思ひに住することが出来る。この一條こそ、

眞に蓮如上人の、信仰の實驗から出た御言である。心を静めて拜讀いたせば、この一條の中に、蓮如上人の活ける信仰が、遺憾なく顯はれてある。何故かと申すに、我等が凡夫である己上は、いかに信決定の身の上でも、妄念煩惱の起ることは昔の通りである。我が胸の中を省みれば、我身ながら震ひ慄くほどの罪惡の凡夫である。こんな機ざまでは、往生いかいであらふかと、我が機をなげく思ひは實際に起るのである。御慈悲を疑ふのではないが、我が機様をなげくのである。我が機ざまをなげく下から、御慈悲の手強さに機づかせてもらへば、直ちになげきの雲は晴れて、かゝる懈怠がちのいたづら者を、もらし給はぬが誓願の不思議ぞと御慈悲の光りに照されて、再び心丈夫になるのである。こんな事

は、一度や二度のことではない、一生幾度も起ることである。その歎きの下から、御慈悲に導かれて、大安慰の心に立ち返る味ひを、明了に御示し下されたのが、この一條の御化導である。然るに古へから、學問上で、この一條を特に難問題として、信心の後に疑ひがあるといふのは、どうも道理に合はぬ、然かし蓮如上人は、明かに、信心決定の上にも、あまり懈怠多くなる時は、往生すまじきかと、疑ひなげくものあるべしと仰せられてある、御語はそうではあるが、信心已後に疑ひがあるとするれば、異安心に陥るやうな心持がする。そこで多くの人が、腫れ物にさわるやうに、講話もせず避けて通るといふのは、實は蓮如上人の實驗上の御語を、我が内心の實驗に照して聽聞せず、唯文字の上で

解釋せんとするからである。苟くも、御慈悲を喜ぶほどの人ならば、之を我が胸中の實驗に訴ねて聽聞すれば、分るの分らんのこと。そんな心配の起る所ではない、實に難有い御化導でこそあれ、何等の六つかしい點もない。御慈悲を疑ふのではない、佛智の不思議を疑ふのではない、しかし我が足もこを見た時、こんな機ざまでは參られるか知らんと、疑ひ歎く心の起るは有り勝ちのことである。其疑ひ歎く心を拂ひのけて、安慰の光りを與へて下さるのが、金剛堅固の信心の徳である。いかに煩惱が起りても、妄念の雲が競ひ起りても、懈怠の心が勢を逞ふしても、少しも歎きも起らず、疑ひも起らず、これで當り前であると思ふ人があるならば、其人の信心こそ尤も疑はしいものである。妄念煩惱の足下をなが

めて、一たびは歎き、一たびは疑ひ、この妄念煩惱の胸をいかにせんと、黒雲に閉ぢらるゝ其下から、他力大行の御催促で、これこそ他力の本願は私一人のためであるわいと、堅固の心になる所で、攝取不捨の利益を蒙つた證據ではありませんか。此所に云ふに云はれぬ信仰の妙味があるのである。

三、自分の身の上話をいたすのは、甚だ恐れ多い次第であるが、思ひ廻せば、明治三十六年、三月七日のことであります。東京の眞宗中學にて、一日の修學旅行をいたしました。百五十人ばかりの一行は、朝八時頃に出發して、遠近に咲ける梅花を賞し乍ら、隅田川の上流なる小臺の渡し場に着きました。然るに此日は風強く浪荒れて、渡し船が甚だ危険である。其上この渡し場には、唯

一艘の渡し船があるのみで、一度に三十人位載せて、三度も四度も往復して居る。最後に四十人ばかり残りて居たが、之を二回に渡すも面倒であるから、生徒も教員も合せて、四十人ばかりを一船にのせました。其時私は、其船に乗る事を拒絶いたした。この浪の荒い日に、四十人も一處に乗るのは、實に危険である、自分の體は、父母の遺體であるから、そんな危険なことをする事は出来ぬ。一船後れるれば、路の三十町位は後るゝけれども、それは覺悟の上であるから、私一人は後に残りて、一船後れて参ります。父母の遺體を以て、こんな危険極まる船には乗りませぬと、きつぱりと断りました。中には私を臆病ぢやと笑ふ人もある、しかし私は一生懸命の場所であるから、笑はれても誹られても致方がな

い、断然一船後れることにいたしました。其時、英語の教授を勤めて居た御方と、體操の教授を勤めて居た御方が、極めて丁寧に私を勧誘して申すには、浪は荒くはあるけれど、十年も二十年も、此の渡し場で經驗をして居る船頭が、大丈夫であると云ふから、安心して乗ってもよいではないか、僕等二人が、君の身上に危険のない事を保証するから、是非に安心して乗つて呉れよと、丁寧に勧誘して呉れました。私も最初の間は、乗らぬと決心はしたけれど、あまり親切に云ふて呉れるから、その親切に動かされて、此上は、我が運命は、船頭と卿等二人にまかすべしとて、終にその船にのりこみました。船が中流に進むと、果して浪は舷端を洗ふて今にも沈没するかと思ふた事が二三度もありました。沈みは

せんかど疑ひながらも、船頭が「大丈夫ぢや安心しなされ」と云ふて呉れる其聲をたよりに、再び心をとり直して、一身を船にまかせて居る中に、船は無事に向ふの岸に着いて、樂しき一日の修學旅行を終りました。この渡し船のことは、偶然の出来事なれども、私は其時からして、非常に難有く感せられて、此事だけは、一生涯記憶して置きたいと思ひまして、自分の記録に書きつけてある。その記録の次に「いそげ人、彌陀の御船の通ふ世に、乗り後れなば誰か渡さん」といふ聖徳太子の御歌と「船も楫もわれどはとらじ法の船、唯船人にまかせてぞ行く」といふ古歌とをかき添へてある。此二首の歌の意味を、其渡し船の事で、實驗させて貰ふたから、これを書きつけて置いたのである。

四 十年も二十年も、經驗に經驗を積んだ船頭が居て、大丈夫

である云ふのに、私が恐れを抱いて乗らぬ、それに二人の友人が、親切に勧めてのせて呉れる。其親切の中に、「いそげ人、彌陀の御船の通ふ世に、乗り後れなば誰か渡さん」との歌の意味が味はれる。さて船には乗りこんだが、浪が荒れ立つて、右左から荒浪が船の端を洗ふ時に、我ながら危ふみ恐れる心が起る。一度は我が凡ての運命を船頭にまかせて、乗りこんでは見たものゝ、浪の音に驚かされて、恐怖の心が起るから致し方がない。其時に船頭の方を見れば、泰然自若として、浪の中に櫓を操つて居る。私共が危ないと號ぶ矢先さに、「大丈夫ぢや、安心しなされ」と勵まして呉れる。其船頭の一言の中に「櫓も楫もわれどはとらじ法の

船、唯船人にまかせてぞ行く」の意味を實驗することが出来る。そこで此二首の歌を、其記録の後に書きつけて置いたのである。然るに今この蓮如上人の御化導を聴聞すれば、十年前の渡し場の出来事は、この御化導の註釋の如くに感せられる。初めは疑ふて居たものが、終に船頭を信じて、決然と船に乗りこんだ。然るに浪が荒いために、恐怖の心が起る。船頭を疑ふのではないが、浪のために心が暗んで来る。我れ知らずに恐怖の心が起る。其時船頭が、大丈夫ちや安心しなされと呼んで来れる。此所に恐れ心は已んで、安慰の心に立ち返る。終に無事に渡り盡して、其日の旅行を面白く終ることが出来た。是は唯世間の出来事である。しかし信仰上の味ひも、やはり同じやうに感せられる。煩惱の浪風

が荒く、懈怠の心が起る時は、こんな機ざまでは、往生いかゞ我ながら危ぶむ、疑ひの心が起る、歎きの心が起る。如來の御慈悲をば、己に信せさせて貰ふて居るのに、やはり此疑ひ心が起る。如來を疑ふのではないが、我が機ざまを歎くのである、我が心を疑ふのである。然るに他力大行の御催促として、かゝる懈怠多くなるものを、たすけ給ふことのあるがたやと、いつの間にやら堅固の心に立ち返りて、いそ／＼御慈悲を喜んで居る。これが他力大行の催促でなくて何でありますか。浪を見れば危ふむ、船頭を見れば安心する。煩惱を見れば危ふむ、他力大行の御催促に遇へば堅固の心になる。これほど難有い御化導を、異安心になるの間違ひが起ると云ふて、腫れ物にさわるやうに、避けて通ると

云ふのは、抑も蓮如上人の御實驗の信仰を、文字や理窟で解釋せんとするから起る誤りである。

五。古人の語に「財を盗む者之を賊といふ、然るに徳を盗み恩を盗む者、之を何とか云はん」と申てある。財を盗む者すら盜賊と名くるならば、人の徳を盗み恩を盗む者をば、何と名をつけたらば宜しからふか、實に普通の盜賊已上である。其罪を論すれば、普通の盜賊に數倍する程の罪人である。然るに或人が私に尋ねて申すには、清澤先生は、如來を信じた上は、自分の思ふ通りにするがよい、凡ての責任は如來が負んで下さると仰せられたさうですが、ほんまにそんな事を仰しやつたのですか。それでは盜賊をしても、人殺しをしてもよいと云ふことになりはしませぬかと、

不思議さうに尋ねた御方があります。然かしこの尋ねた御方は、有り體に云へば、自分は盜賊はせないから差支へはないが、そんな事を教へたら、誤つて盜賊をする人が出来るかも知れぬと、他人の身の上を心配して居るのである。しかし其人は、自分は盜賊でないと思ふ心が、已に宗教的自覺のない證據である。財寶を盗む人のみを賊と思ふて、親の恩を盗み、師の恩を盗み、如來聖人の御恩を盗んで、無慚無愧の行ひをして居ることを、盜賊已上の悪人ちやと氣づかぬ人である。この宗教的自覺がないから、盜人でも往生すると聞けば、忽ちに驚きの聲を立てるのである。しかしよくよく考へて見れば、私共が御互に、日々親の恩を盗み、如來の御恩を盗んで居るではありませんか。如來の恩寵の下に養育

せられ乍ら、嘗て御恩といふ事も思はず、師父の恩寵の下に養育せられ乍ら、幾度か師父を泣かせて居るではありませぬか。自己が世間普通の盗賊よりも、尙一層悪徳の者ちやと氣づかせて貰ふて見れば、盗人も尙往生が出来ると聞けば、私人のための救ひの聲ちやどこぞ聞ゆれ、他人を誤るの世を誤るのど、そんな事を云ふて居るひまはない筈であります。蓮如上人の此の一條の御化導もやはりそれと同じ事である。御慈悲を喜びながらも、尙妄念煩惱のために泣く人に對しては、此上もない難有い御化導であります。然るに此一條を拜讀して、信心已後の疑ひと云ふことが、どうも道理に合はぬなご申すのは、信仰を實驗的に味はずに、唯遠方に眺め置いて、信心決定の上には、妄念煩惱も起らぬことの

やうに思ふて居る人である。理屈で解釋しやうとする人である。そこが清澤先生の御注意なされる所で、道徳のため功名利達の爲に宗教があるのではない、人心の至奥の至誠の要求のために、宗教があるのちやと仰せられる所で、誠に御互に警誡すべき所であります。うつかりすると他人のための宗教となつて、自己内心の必然の要求に基づく宗教といふことを、忘れて通るやうなことになるります。何卒自己の實感に訴へて、蓮如上人の御化導を聴聞いたしたい事であります。

第五回 罪の沙汰無益なり

一。春の暖かな日に、右に小兒の手を引き、左に手籠を携へて、

溪を渡り野山を過ぎて、土筆や野薇を摘んで来て、それを漬物や煮附にして食べた時は、無上の味があるものである。他の人の摘み取つたものを貰ふて食べた所が、土筆や野薇は、さほどの味のあるものではない。天は、勤勞の人には、安逸の人の知り得られぬ快樂を與へて下されてある。金殿玉樓に住んで御座る御方は、土筆や野薇の眞の味は知て居らぬ。是は野山を徘徊して、一日の勤勞を積んだ人のみ、唯ひとり知る所である。信仰上の御話も、土筆や野薇の味と同じことで、唯耳先の聽聞、口先の領解の人に、眞の妙味は分らるのである。我が心の中を省みて、我は何故に、かくも罪深き者なるか。我は何故に、かくも慕ない運命を持つて居るか。人生の野山を踏み分け、悲歎の溪を越へ、煩惱の橋

を渡りて、其間に如來の御慈悲を味ふた時に、始めて信仰の尊い妙味が分るのである。

二。私の家族に、病人があつた時、一人の老婆をたのんで、按摩をして貰ひましたが、この老婆は頗る御慈悲を喜ぶ人である。按摩をしながらも、我が身の仕合せを喜んで、如來の御慈悲を仰いで居る。然かし乍ら、仕合せを喜ぶと申しても、世間の人の云ふ仕合せとは異なつて居る。美麗なる家屋を持つて居るのでもなく、また秀美なる衣服を持つて居るのでもない。然かし其身の六十餘年の生涯を顧みた時に、この御慈悲を聞き得たことを、喜ばずには居られぬのである。彼女の話す所を聞いて見ると、十八歳の時に、能登の國から京都に上り、今日まで四十八年の間、同じ借屋に住

んで居ると云ふ事である。十年間位ならば、同じ借屋に居る人も少くないが、四十八年の間、同じ町で同じ借屋に居るといふ人は、随分珍らしい話である。一寸聞きますと、四十八年間も、一つ家に住んで居ると云へば、餘程結構なやうに聞へますが、實際の話を見て見れば、随分氣の毒な生涯である。然かし野山を尋ねて摘み取った土筆や野薇に、眞の風味があるやうに、有爲轉變の有様を、充分経験した中に、變らぬ御慈悲を聴き得た所に、眞の信仰上の妙味があるのである。かの老女の話す所に由れば、私は十八歳で京都に参りましたが、其明くる年の七月が、蛤御門の戦争で、都に住み始めた最初からが不運なのであります。其時の御武士方の風彩と云ふたら、丁度錦繪で見るやうに、皆後ろ鉢巻に、

鎗や抜刀を持って御座るので、蛤御門の方から、南の方に落ちて來る御方は、追ふ人も追はれる人も、顔の色は皆青ざめて、日頃の御顔色は少しもないのです。其時、私が見て居る眼の前に、二人の武士が落ちて來ましたが、一人は傷を負んで、とても助からぬから、友達の御方に頼んで、自分の首を打て貰ふと、打た方の武士は、その首を風呂敷のやうな物に包んで、一生懸命走るので、誠に恐ろしい事でありました。其戦争の時に、焼き立てられたのが、抑も不幸の始まりで、やつと暮しがつくやうに成たと思ふたら、蛤御門の戦争から、五年目が、鳥羽伏見の大戦争で、恐ろしい事に何度も遇ひました。私の國に歸つて見ますと、さほど變つたやうでもありませんが、京都は四十八年の間に、變りました變

りました。變らぬものは、私を救ふて下さる如來さまの御慈悲ばかりであります。其間には、良人にも別れ、兒供にも別れ、色々の浮き艱難をいたしました。誠にも不思議な因縁で、今日まで生き永らへて變りがちの浮世の中に、變らぬ御慈悲を聴聞させていたきました。四十八年の間に、私の町内に住んで御座つた御方の中には、奇麗な家を建た御方もあれば、榮耀榮華な日暮しをなされて、世間の人様に羨まれた御方もありました。一代で亡びる人もあれば、二代目で亡びる人もある。蛤御門の戦争から今日まで、同じ町内に住んで居る人は、私の外に、唯御一人あるばかりで、其ほかの家は、二代も三代も變つて居ります。一昨年は、神戸の親類の家に參つて居ります中に、神戸の沖合で、海軍の演

習があつた後に、親艦式とか云ものが行はれるので、親類の若い者につれられて、沖合まで參りましたが、不運にも、浪のために、通ひ船から海に落ちました。其時は、今度こそは、日頃聴聞の通り、平生業成の御約束やから、水で死んでも火で死んでも、往生一つは、誓願不思議の御はからひちやど、ちやんと明めて居ましたが、元が海岸に生れたもので、少しばかり水心があつた勢か、一返沈んだ者が、再び浮き上つた時に、船頭にたすけられました。ぬれ鼠のやうに成て、海岸に着きましたが、ごの人力引も乗せて呉れませぬ、そんな者に乗せると、人力車が汚れると云ふて、誰も相手にして呉れませぬ。其中に五十歳位の人力引に出遇ひましたが、乗せて呉れど頼みました所が、御前のやうな人に乗せるの

こそ、ほんまの功德ちやと云ふて、宿先まで送つて呉れました。六十年も世の中を渡つて見ますと、人様の心の甘いも酸いも善く分ります。六十餘年の生活の間に、何一つ當てになるものには出遇ひませんが、唯この悪人を、漏らし玉はぬ御慈悲一つが、末の末までたよりであります。今朝も御本山に參詣いたして、御眞影さまに御禮をとげて、家に歸りますと、此家からの御知らせで、また今日も御慈悲の中に、働らかせて貰ひますこの話である。

三。實地に野山を涉つて來た人は、土筆や野薇の味が違ふ。耳先で聞くのではない、我身の上には、現實の御慈悲を味ふのである。他の人の、仕合せや不仕合せを話して居る間はない、我が身が、只今現在に御慈悲に包まれて居るのを喜ぶのである。エビクテタ

ス|が云ふ、「爾、人に譏れなば、打たれざりしを喜べ。爾、人に打たれたらば、傷つけられざりしを喜べ。爾、傷を受けたらんには、殺害せられざりしを喜べ」と、私共が、今日までの我身の上を顧りみますと、病氣にも、貧乏にも、迫害にも、火事にも、生別にも死別にも、色々な出來事に出遇ひましたにしても、ごにかく今日まで生き永らへて、此御慈悲に氣つかせて貰ふた事が、大いなる仕合せ事である。浮世の事には、浮世の價がある。眞實の御慈悲には、眞實の價がある。浮世の富貴は、無事に持ち續ける事か出來ても、此世一生で別れて仕舞はねばならぬ。如來の御慈悲の聞へた信心には、此世から仕合せを喜んで、末の末まで變らぬ佛果の御悟りがある。蓮如上人の仰せに、「堺の日向屋は、三十萬貫

を持ちたれども、死にたるが、佛には成り候ふまじ。大和の了妙は、帷一つをも、きかね候へども、此度佛になるべき事よ」と仰せられた。さきの御話の老女は、四十八年の都の生活の中に、同じ町内の富貴榮華な人も澤山見たが、浮世の富貴には浮世の價がありて、僅か四十八年の中に、富貴榮華な人は、皆痕跡も留めないのに、其身ひごりは、貧乏ながらも御慈悲を喜んで、我身の仕合せを感謝して居る。蓮如上人の仰せられる、大和の了妙の御話を、今眼前に見るやうである。聖賢の書を読み、哲學を學んだと云ふ人で、生活問題を苦にして、陰氣な日暮しをする人は少なくないが、かの老女は、不幸の打續く中にも、按摩の術を覺て以來、今日まで一日も、食物を得なかつた事はないと云ふて居る。

富貴榮華な人達は、幾人も家を亡ぼしたのに、彼女ばかりは、今日まで、如來の御手から充分の食物を與へられて、其上に精神上的の安慰を賜はつて居る。エピクテタスが云ふ、「爾は何故に生活問題を苦慮するか、健全なる人の生活を見よ。妻子あるソクラテスは、いかに生活せしか、夜は水を汲み、晝は哲學を學びシクレアソテスの生活は如何。爾、是等數子の如き職業を辭せずとならば爾は到る處に生活の道を發見すべし」と教へられてある。理窟ではない、唯の話ではない、實地の問題である。蓮如上人の大和の了妙に對する御話と、エピクテタスの生活問題に就ての教訓を、眼の前に一人の老女に就て教へられて居る。土筆や野薔は、野山から實地に摘んで來た所で、始めて無上の妙味がある。信仰上の

御話は、現在の我が身の上に引當て、見た所で、始めて眞の妙味が分るのである。彼の老女の如きは、自ら野薇を野山に摘んで、眞の風味を見つけた人である。今晚御話しいたす所の、「御一代聞書」の御話も、昔話と思はずに、現在の我が身の上に味はふて貰はねばならぬ。

一。順誓まふしあげられ候、一念發起のところに、つみみな消滅して、正定聚不退のくらゐにさだまるご御文にあそばされたり。しかるにつみはいのちのあるあいだ、つみもあるべしとおほせさふらふ御文ご、別にきこねまふしさふらふやご、まふしあげさふらふごき、仰に、一

念のごころにて、つみみなきねてごあるは、一念の信力にて往生さだまるごきは、つみは、さはりごもならず、さればなき分なり。いのちの娑婆にあらんかぎり、つみはつくるなり。順誓は、はやさごりて、つみはなきかや。聖教には、一念のごころにて、つみきねてごあるなりご仰られ候。罪のありなしの沙汰をせんよりは、信心をさりたるか、ごらざるかの沙汰、いくたびも、よし。つみきねて御たすけあらんごも、つみ消えずして御たすけあるべしごも、彌陀の御はからひなり。我ごしては、はからふべから

す。たゞ信心肝要なりと、くれぐれおほせられ
さふらふなり。

四。順誓と申す御方は、法敬坊と申す人のことで。永らく蓮如上人に御給仕をいたした人である。是から後にも、「御一代記聞書」の上に、たび／＼御話の出る人であります。蓮如上人の御文の上には、彌陀をたのむ一念のところに、罪はみな消ね去て、正定聚不退の位になると仰せられてある。これは御話をするまでもない、御文を拜讀いたせば、幾所にも、拜見することである。然るに、蓮如上人の御法話の時に、たごひ信決定の身の上でも、この煩惱の肉體のある間は、一生涯罪をつくるものちやが、その罪惡のなりで、御たすけに預かるのが、誓願の御不思議ちやぞと、御

法話があつたと見わる。そこで順誓が不審を起したのである。御文の方には、信の一念のところに、罪は皆消滅すると仰せられるのに、今の御法話には、信決定の上にも、罪は一生涯つくるものちやぞと仰せられては、御文の御思召と違ふやうに思はれる。これが順誓の不審の起つた所である。或人が論語を讀んで、孔子の門人方の御尋ねは、皆尤も至極な御尋ねばかりであるのに、我々は、かやうな適切な疑問の起らんのは、どう云ふ譯でありませうと御尋ね申した時、淡窓先生の御答へに、孔門の人達は、御師匠から聞いたことを、皆實地に行ふたのである。實地に行ふて行くこと、適切な疑問が湧て来る。今の人は、多くは耳先で師匠の御話を聞くから、適切な不審も起らぬと申されたさうである。順誓

の御尋ねの趣も、耳先で聞かずに、心の上に聞たから、かくの如き適切な不審が起つたのである。我が身の上を省みると、信の一念から臨終まで、たしかに罪を造て居る。この罪惡のまゝの御たすけと聽聞すれば、これほど難有いことはないが、それでは、兼ての御文の御化導と、異なるやうに思はれるとの申分である。

五。これに對する蓮如上人の御化導が頗る難有い。信の一念の所にて、罪が消ぬるとあるのは、彌陀をたのみ一念の時に、往生の一事は、不可思議の願力として定め給ふ故に、罪は山ほどあつても、少しも障りとはならぬ。さはりとならぬ已上は、罪はあつてもないと同じことである。そこを罪みな消ねてと仰せられたのである。これは信心の徳から申すことである。凡夫の身の行ひか

ら申せば、淨土に参りて、佛果の悟りを開くまでは、相かはらず罪を造るのである。しかし自力の往生ならば、罪のありなしの沙汰も必要であるが、他力の往生には、罪の沙汰は無益である。罪を消して、然る後に往生させて下さることも、罪ありながら往生させて下さることも、そこは彌陀の御はからひである。佛智不思議の善きやうになさしめ玉ふ所である。清澤先生の御話に、まことの安心をしたいと思ふ人は、如來の仕事盗むなど申されました。罪を消してたすけうとも、消さすしてたすけうとも、そこは如來の御仕事の領分である。然るに如來の仕事盗んで、凡夫の淺智慧で極めやうとするから、いつまで經ても極まらんのである。信心の徳から云へば、罪が消ぬるやうにもある、我が身の實地の生

活を見ると、朝から晩まで罪を造て居る。これは何方がほんまか知らんぞ。そんな事を案じ煩ふのは、如來の仕事盗むと申すものである。そこで蓮如上人が、誠に明快に、そんな問題は、彌陀の御はからひに屬すべきもので、我としてははからふべからずと仰せられたのであります。御開山聖人の、「佛智を不思議と信じつる上は、とかく御はからひあるべからず候ふ」その御化導と同一であります。

六。永らく佛法を聽聞し乍ら、安心が出来ずに苦しむのは、大抵は罪惡の問題である。こんな氣さまでは、參られるとか參られぬとか、罪があるとか無いとか、そんな問題に皆苦しんで居る。然かし今晚の蓮如上人の御化導が、眞に腹底に聽聞が出来たなら

ば、罪や障りの事には手を離して、思ひ切て御慈悲一に腹がふくれる事が出来る。罪のことは、如來の御はからひにまかせて、少しも案するなどの仰せは、御文の上でも、聽聞することは出来ませんが、「御一代記聞書」の方では、不審のある人を御相手の御法話だけに、別して適切に聽聞が出来ることでもあります。

第六回 たのむ心も他力

一。杜鵑雲に叫んで、思ひ出多き六月となりました。今から八年前の六月六日は、清澤先生の御逝れに成つた當日であります。此青年會も、六月の會合は、清澤先生追想の會として御話をいたします。今から回顧すれば、早や十年昔の話になりますが、私が

一日浩浩洞を訪問して、友人佐々木月樵君の室に於て、色々の座談に移りました。其時私は、圖らずも伊藤仁齋先生の御話をいたしました。是は名高い話であるから、今事新らしく申すまでもない事ですが、仁齋先生は、貧困の中から、専心一意に聖人の道を學んで居られました。或年の暮の事であります。仁齋の妻は、五歳ばかりの我が兒を抱いて、町中を通りますと、何分年末の事であるから、何處の家も餅を搗て、小供は皆餅を持って居る。それを見るに、仁齋の兒が頻りに餅を欲しがらる。然かし仁齋の家は貧乏で、年末の餅が搗けないのであるから、小兒にやる餅がない。さればさて、餅を買ふ程の金銭は更にない。終に仁齋の妻は見るに見かねて、仁齋の讀書の室に進み、あなたは學問をして、聖人の

道みちを學まなぶと仰たつしやるが、少すこしは臺所だいどころの事ことも考かんがへて下くだされねば困まります。今日けふも今日けふさて、小兒こどもをつれて町中まちなかを通とおりますと、餘所よその小供こどもが餅もちを持って居ゐるのを見みて、我が兒こが非常ひじょうに欲ほしがつて泣なきまます。貧乏びんぼうぢやから、我が家いえには餅もちはないのぢやと、いくら言いふて聞きかせても、小兒こどもは貧乏びんぼうの何物なにかたるを知らぬから、相變あひかはらず餅もちを求もとめて泣なきます。何とか餅もちの工面くめんをして下ください、私は小兒こどもの泣聲なきこゑを聞きく度に、實じつに腸はらわたがちぎれますと、言いひ終おつて涙なみだが泣然げんぜんとして下くだりました。仁齋じんさいは、之これに對たいして一言いっごんの申譯まをわけをせず、我身わがみに着きけて居ゐた羽織うゑを脱ぬいで、それを妻つまの方に投なげやつて、再び机つくえに向むかつて、一心不亂いっしんぷらんに書かを讀よんだと申ます事ことである。其時そのとき餅もちを求もとめた小兒こどもこそ、仁齋じんさいの長男ちやうなんで、後のちに東涯とうがい先生せんせいと申まして、大學者だいがくしやに成なつた

御方であります。今日の漢學者で、東涯先生の御恩を蒙つて居らぬものは一人もない。なせと申すに、東涯先生の著書は、誠に精密に調べたもので、今日の漢學者は、多くは其著書を根據として字義を解釋して居るのである。トルストイ伯の話に、人間はそんなに心配せんでも、小供は必らず養育の出来るものぢやと申してあります。年末に餅一つを求めて泣いた小兒は、終に一代の大儒と成つて、後世の人を益する大事業をいたしました。

二 この仁齋先生の話が終ると、佐々木君は、忽ち笑ひを漏らして言はれるには、實は、僕は今朝から何だか不愉快で、ろくに讀書も出來ず、陰鬱の氣に打たれて居ましたが、今仁齋先生の御話を聞いて、誠に精神が爽快になりました。私共は、學問の中途

に於て、色々な不平や陰鬱の氣に打たれますが、仁齋の道を求めた態度を思へば、私共の愚癡は物の數でもない。先生の氣象を學んで、御互に一層奮勵せねばなりません。それに就て、僕も先日讀書の節に、一の教訓を得ましたから、其御話を致しませう。昔印度に、戒行を持てる比丘があつて、二三十人打つれて、野山を旅行して居りますと、一群の山賊が現はれて、其比丘等を野原にねち伏せ、原上の青草にて手足を繋いで、凡ての所持品を奪ひ去てしまひました。山賊の去つた後で、草に繋がれた比丘等は、其儘に野原に偃して、依然手足をつながれて居る。其所に其國の王様が、數多の臣下を率ゐて、狩獵に參りました。草に繋がれた比丘の有様を見て、いかゞいたしたこの御尋である。比丘等は、山

賊に遇ふた事を、有りの儘に言上いたしました。其時國王が申すには、それは氣の毒の至りであるが、已に山賊共の立ち去つた後に、何故に青草に繋がれて、依然として野原に臥して居るのか、手足を少しばかり動かせば、青草位は、何の苦もなくちぎり去る事が出来るではないかとの仰せである。其時比丘等の申すには、私共は、戒律を持つて居る身で、物の命を取ることを嫌ひます。青草をねぢきる位は何でもありませんが、青草にも尙生命はあります。今私共が、此儘野原の上に横つて居るならば、餓死することば必定でありますが、たとひ餓死はしても、青草の生命を奪ふて、自分の戒律を破ることは出来ませぬと。此時國王は、深く感ぜられたと見えて、其方たちは、青草をすらも憐むのに、予は時

々狩獵を催ふして、鹿や狐の命を奪ふて、それを樂みにするとなごは、誠に耻ぢ入つた次第である。今日以後は、予は山野に獵をするをば已めにするとして、臣下に命じて青草を解かしめ、比丘の縛を放つてやつたと申すことである。

三。此話は、先日僕が、藏經を閲讀する時、讀み當つた話であります。君の先きに話された仁齋先生の態度と云ひ、今此の比丘の道心堅固な事と云ひ、頗る私共をして奮起せしむる。實は、今日は朝から不愉快で、何となく精神も沈み勝であつたが、こんな話をして居る中に、非常に爽快になつて來た。幸に清澤先生も御座るから、階下の先生の室に參つて、御話でも致しませうかと、互に相携へて先生の室に參りました。先生が御茶を出すや出

さぬ中に、佐々木君が突然として申すには、先生、實は私は、今朝から不愉快でありましたが、今安藤君が見て、伊藤仁齋の話をして呉れたので、非常に爽快になりましたと申す。先生の仰せに、「やはり他力が難有いのです、他力でなければ苦惱を脱することは出来ませぬ」と申されまし。私共は、他力の御慈悲と云ふことを、遠方に眺めて、いつ他力に出遇ふことか、案じ煩ふて求めて居る。其實他力の御慈悲は、常に私共の身の上に注がれて居る。その手近い御慈悲を喜ばずに、苦悶や不平の中に日を送るのは、誠に淺ましい事と申さねばならぬ。蓮如上人は、疊を摩で衣の襟をたゝいても、南無阿彌陀佛にまるめられたりと御喜びなされた。自分が苦悶に沈んで居る時、友人が来て座談をいたす位

は、何でもない事のやうですが、絶対他力の信念に住して居る人にとりては、それが直ぐに他力の御計らひと喜ぶのである。自分が憂ひに沈んで居る、それを友人が慰めて呉れる、他力の御慈悲は友人の上に顯はれて居る。清澤先生が、佐々木君の一言を聞くや否や、「やはり他力が難有いのです」と、何の苦もなく申された所は先生の面目がよく顯はれて、他力の指導を深く信ずる先生の御心の程が、尊敬するに餘りある次第であります。

四。是と同じやうな話であります。人生の成功に就て、機會といふことが尊重せられてある。然かし常人の視る機會と、哲人の視る機會とは、視やうが頗る異つて居る。常人は、いつか好機會に回り合ふて、一時に成功したいものちやと、遠方を望んで機

會の來るのを待て居る。そして一生涯終に機會に出遇はない。然るに、哲人の機會を視ることは頗ぶる是と異つて居る。機會は、毎日我が身の上に来て居るとは、哲人の機會觀である。醫者が成功するためには、毎日の來患者が、即ち機會を供給して呉れて居る。商人が成功するためには、毎日店頭に来る估客が、即ち成功の機會を供給して呉れて居る。軍人のためには、日々の教練が成功の機會で、學生のためには、日々の授業が成功の機會である。醫者が患者を粗末に取扱ひ、商人が估客に不信用な事を爲し、軍人や學生が、其日々々の課業を怠つて居つて、いつか成功の機會が來るだらうと、十年待つても二十年待つても、別に機會が來るものではない。一日々々の仕事、凡て成功の機會でなければならぬ。

米國のデュエー將軍は、まだ海軍大佐で、一艦長として立つて居る時分に、海軍省から、何時檢閲を行つても、デュエー將軍の軍艦だけは、ちやんと整頓して、何時でも戦争が出来るやうに成つて居る。嘗て米國が、外交上の談判からして、一隣國と戦争を開かんとした時に、デュエー將軍が、海軍省に相談をせず、獨斷にて石炭を買ひ込み、何時にても海軍が出勤されるやうに準備をした。此時からして、將軍は深く海軍大臣に信任せられた。然るに其後米國はキューバ島の獨立問題に關して、西班牙と外交問題が面倒になつて來た。米國では、萬一の場合には、デュエー將軍の手腕を煩さねばならぬと決心して、將軍を東洋艦隊の司令長官に任命した。將軍は全艦隊を支那海に碇泊せしめて、本

國からの訓令を待つて居ましたが、愈よ外交斷絶の電報を受取る
と、其夜直ちに碇を抜いて、マニラ灣に向ふた。西班牙の艦隊は
この灣内に集合して居たが、まさか米國艦隊が、此灣内に進入
しやうとは夢にも思はず、海軍士官などは上陸して、妻の手を携
へて樹陰を散歩などして、呑氣な生活をして居る中に、外交斷絶
より二日目の夜明けに、デュエー將軍は全艦隊の燈火を滅して、
マニラ灣口の砲臺の下を通り抜け、朝日の輝く時分に、突如とし
て西班牙艦隊の前面に現はれた。西班牙軍は、愕いて戦備を整へ
たが、間に合はず、二時間ばかりにして艦隊は全滅した。デュエー
將軍は、此に始めて朝飯を食べることを命じ、全艦隊が朝飯を終
るや否や、陸上砲臺の攻撃に移りて、二時間ばかりの間に之も陥

落せしめた。デュエー將軍が、始め支那海を出發する時に、「デュ
エー將軍動く」といふ簡單なる電報が、米國海軍省に到着した。
海軍省では、將軍が動いたならば、必らず驚く可き警報が至るで
あらうと、鶴首して待つて居ると、其翌日には、早やマニラ灣に
於ける敵艦隊を全滅し、陸上砲臺を悉く占領したとの電報が到着
した。此事に關し、ルーズベルト氏は批評を加へて、デュエー將
軍の成功は、唯平素の訓練に基づくこと云ふて居る。成功の機會は
突然として天の一方から來るのではない、日々我等の身の上に蟬
集して居る。偉人は、日々來る機會を逃さずに、誠心誠意、其業
務に勤勉して居る。常人は之に異なつて、平素は怠惰に暮らして
置て、いつか成功の機會が來るであらうと待つて居る。然かも一生

涯その機會に出遇ふことが出來ずに終るのである。

五。日々の生活の上に、常に他力の御慈悲を喜ぶ人と、日々の生活の上に、常に機會を握つて居る人とは、頗る相似た所がある。念佛さへ申して居るならば、いつか他力に出遇ふに違ひないと、他力が天の一方から來るやうに思ふて、それを待て居る人は、一生涯待つても他力に出遇はぬ。絶對他力の御慈悲を信じて、未來の極樂往生は申すまでもなく、此世の中から、他力の御導きの下に日暮しをさせて戴く人は、日々他力の御恵みに浴して居る。世の中には、御慈悲は信じて疑はぬが、日々の生活の中に、喜びが起らぬので困る。なせ此やうに私は、喜の心が起らぬか知らぬと喜ばれぬ事を、非常に氣にかける人がある。かう云ふ人は、たす

けて下さる御慈悲だけが他力で、喜ぶのは自分の力で喜ぶことちやと思ふて居る。自分の力と思ふから、喜ばれぬのが氣にかゝる。こんな事では參られまいと、疑ひ歎く心は、此所から起るのである。親鸞聖人は、念佛一遍にても、彌陀の御催しにあづかつて申すことちやと仰せられる。蓮如上人は、御慈悲を喜ぶ心も、皆他力より與へ玉ふ所ちやと仰せられる。此味が腹底に落つると、喜ぶ喜ばぬの心配よりも、貪瞋煩惱の荒波の湧き起つて、歡喜の光りの起りさうにもない所に、せめて一日に、三遍なりと五遍なりと、御慈悲を思ひ出させて戴き、念佛申させて貰ふことだけでも早や御禮の申上げやうない程の御慈悲である。小兒が親の名を呼んで、母さんと言ふまでには、親の方には種々様々の手数が掛

つて居る。貪瞋煩惱の胸の中から、御慈悲の親の名を呼んで、念佛申すまでには、他力の方で、いかばかりの御手が掛つたか測られぬ事である。清澤先生が、佐々本君の一言を聞いて、朋友の來訪が難有いと言はずに、突如として、「他力が難有い」と申されたのは、いかにも先生の面目が顯はれて、御心の程が尊とく思はれます。今晚御話し申す所の、「御一代記聞書」の一條も、上に申し述べた御話の意味でありまして、信するも喜ぶも、凡て他力の賜物ぢやとの御化導であります。

一。眞實信心の稱名は、彌陀廻向の法なれば、不廻向となづけてぞ、自力の稱念さらはるゝこいふは、彌陀のかたより、たのむこゝろも、た

う、ごやありがたやご、念佛まうすこゝろも、みなあたへたまふあへに、ごやせんかくやせんごはからうて念佛まうすは、自力なれば、きらふなりごおほせさふらふなり。

六。初めの四句の御言は、正像末和讃の中の御言でありまして信する心も、喜ぶ心も、皆他力より與へ玉ふ味を御示し下されたのであります。其御和讃を御話の糸口として、絶對他力の意を御明し下されたのが、此一條であります。香樹院師の御化導に、「たすけて下さる御慈悲が、他力であるご云ふことまでは、大抵の人も聽聞が出来るが、其御慈悲を信するまでが、他力の御催しぢやご氣づく人の少ないのが残念ぢや」と申されてあります。他力の

信心は、我がかしくて信ずるのではない。一度びはたすけずば置くまい、此法を信じさせて、苦惱の中から救ひ出さずば置くまいこの、強い御慈悲が透つて下さるから、眞實信心が戴かれて、往生一つは、彌陀願力の不思議で、御たすけ一定ぞと、信心決定が出来るのである。信心が已に他力の賜物であるから、此信心から顯はれる稱名念佛は、勿論他力の賜物であります。自力の念佛は、行者の方から、如來の方へ差出して、この稱へた力で御たすけにあづかりたいとたのむ故、自力の廻向として嫌はるゝのである。眞實信心の稱名は、我が計らひで申すのではなくて、彌陀の方からの御廻向が、私共の胸の上に顯はれて、感謝の念佛となるのであるから、彌陀の方から云へば廻向、行者の方から云へば不

廻向である。そこで不廻向といふ事は、分り易く申せば、他力よりの下され物と云ふことである。たのむ心も他力の廻向、喜ぶ心も他力の廻向、喜ばれるとか、喜ばれぬとか、すむとか、すまぬとか、そんな心配を離れた、いき／＼した喜びが、他力廻向の喜び心である。佐々木君の活きた現實の喜び心を指して、清澤先生が、他力が有難いと申されるのは、この一條の御化導と同じ意味合と思はれます。とやせんかくやせんと、計らふて申す念佛は、まだ他力の御慈悲を知らずに、煩惱具足の此心をたよりにして居るもの故、自力の念佛として嫌はるゝのである。どうか此青年會員は、成功の機會は、日々の生活の上にあるのちやと信じて、其日其日の勤めを大切にして貫はねばならぬ。他力の御慈悲は、日

日の生活の上に注がれて居ると信じて、今日一日の存命を喜んで
歡喜の日暮しをいたして貰はねばなりません。

第七回 機のおつかひは雜修なり

一。秋の時分には、充分霜の強いのが善い、霜が強いと草木の
葉が悉く枯死する。秋に充分枯らして置く、春の花が見事に榮
へる。秋の霜が薄くて、草木の葉が落ち盡さぬやうでは、其翌年
の春色は、必らず微々として榮へないと云ふ事である。是は天地
自然の理で、獨り草木の盛衰に關するのみでなく、人間の精神狀
態も、やはり是と同じことである。善導大師が、機法二種の深信
と云ふことを御立てなされて、機の深信とは、我が身の罪惡深重

にして、迷ひを離るべき因縁なきことを、絶待に信すること、法
の深信とは、其罪惡深重にして、出離の因縁なきものを、佛力不
思議を以て、たすけ玉ふことを深く信する事と申してあります。
親鸞聖人は、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は
一定すみかぞかし」と、御自身の機根のつたない事を信せさせら
れ、法然上人は、愚痴の法然坊、十惡の法然坊と仰せられて、我
が機根のおどり果てたることを表白なされてある。一寸聽いて見
ると、善導大師、法然上人、親鸞聖人の、機の深信のなされ方は
あまりに強過ぎるやうである。然かし其強過ぎる所が、即ち秋霜
の草木を枯死せしむること嚴重なものと同じ事で、信仰の花の、や
がて盛んに開けて來る所以である。我が身が、眞に罪惡深重にし

て、恩愛の海に沈み、名利の淵に没して居るものちやと、堅く我が機の上を信じた人ならば、信心以後に於て、胸中の妄念が、いかに盛んに湧き起ることも、その煩惱のために、佛智の不思議を疑ふ心は起らぬものである。人間は、眠る時には充分眠るがよい、半眠りにして置くと、眠りが醒めた後に、充分の活動が出来ぬ。英國の大學には、「善く遊んで善く勉強せよ」と云ふ教育の主義があるやうに聞きました。が、頗る面白い。遊ぶ時には充分遊ぶがよい、そして勉強の時には、精力を傾け盡くして勉強するが善い。清澤先生が、嘗て本願寺の革新を唱へて、其幕を閉づると云ふ時に、人々が先生を白川村の寓居に訪問して、今一度立ては如何ですと勧めた時に、先生は、「眠る時には充分眠るが善い」との一點

張りで、眠ると決心した已上は、誰が誘ふても、頑として應じなされぬ。終に三河の大濱に高臥して、充分に熟睡なされた。この熟睡より醒めた時が、東京に於て、絶對他方の信仰を鼓吹いたされた始めである。先生は眠る時には充分眠る、醒めた時は、天下の人心を風靡する程の偉業をなされた。此點になると、天事、人事、信仰、三者共に同じ眞理を有するもので、秋には霜の強いのが善い、霜が強くて、始めて春の花が榮へる。眠る時には充分眠り、遊ぶ時には充分遊ぶが善い。そして活動に入る時に、自己の精力を傾注するがよい。我が機根のつたない事を信する時には、善導大師の教訓の如く、法然上人、親鸞聖人の御手本の如く、罪惡深重、地獄一定、出離の縁なきものご、充分堅く信するがよい

此地盤の上に建てられたる他力の信仰は、煩惱の黒雲起ることも、妄念の暴風來ることも、決して動搖することがない。親鸞聖人が、一方には、御自身の機根を眺め玉ひて、「愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかすに在ることを喜ばず、眞證の證に近づくことをたのしみます、恥づべし傷むべきかな」と御歡きになつて御座るのに、然かも一方には、「いそぎ參りたき心なきものを、ここにあはれみ玉ふなり、これにつけてこそ、大悲大願はいよくたのもしく、往生は決定と存知しさふらへ」と御喜びなされる點は、實に信仰上の御手本で、私共の最も注意して聽聞すべき所であります。一方では充分に殺して、一方では充分に活かしである。今晚御話をいたす所は、「御一代記聞書」の第四十條で、

常に煩惱の足下を眺めて、歎きを生ずる私共に取ては、最も難有一條で御座ります。

一。愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかすに在ることをよろこばず、眞證の證にちかづくことをたのしまずさまふす沙汰に、不審のあつかひごもにて、往生せんずるがすまじきなんご、たがひにまふしあひけるをものごしに、きこしめされて、愛欲も名利も、みな煩惱なり。されば、機のあつかひをするは雜修なりご、おほせさふらふなり。たゞ信ずるほかは、別のことなき仰せられ候。

二。この一條の御話にかゝる前に、一寸注意して置かねばならぬことがあります。それは、機を歎くと云ふ事と、法を疑ふと云ふ事との區別であります。これは全然區別をして置かねば、御話が混雑してなりませぬ。機を歎くは、人間の美德であつて、信仰の上には、更に差支のないことでもあります。法を疑ふと云ふは、佛智の不思議を信せぬことで、信仰の大敵であります。學問をする人は、こんな事では勉強が足らぬ、こんな事では古人の萬一を學ぶことが出來ぬと、我が精力の足らぬことを歎くので、始めて學問が進步するのである。親に孝行をする人は、こんな事では、親の御恩の萬分一も報ずることが出來ぬ、こんな事では、古への孝行人に及ばぬと、我が孝の足らぬことを歎くので、始めて孝行

が行はれるのである。若しも學者にして、我が學問は是で充分であると思ふたなら、其人の學問は最早や下り坂である。親に事ふる人にして、我が孝行は是で充分ちやと思ふならば、其人は最早や不孝の出發點に足を踏みかけて居る。我が機を歎くので、學問も進めば孝行も行はれる。孔子は、「論語」の中に、「善を見て遷る能はず、惡を知て改むる能はず、是れ我が患ひなり」と申されてある。此の御歎きのある所が、即ち聖人の聖人たる所以で、發憤して食を忘れ、樂んで憂ひを忘ると申される如く、日に月に、道に進み玉ひし所以である。我が機を歎くのは善いが、機を歎くために、終に法を疑ふと云ふことは、甚だ善くないことである。法然上人は、機を歎かれた御方である、されど機を歎くが故に、一

層深く法を喜び玉ひた。「いかにして、我れ極樂に生れまし、彌陀の誓ひのなき世なりせば」と云へる御歌は、我が機を歎くと共に若しも彌陀佛の誓ひのましまさずば、我等が如き罪惡の身は、いかにして淨土に生れることが出来やうかと、一層深く法を信じ玉ふたものである。親鸞聖人が、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑すと仰せられしは、機の歎きではあるが、是がために法を疑ふと云ふことは少しでもない。ないのみならず、是がために一層深く佛智の不思議を御喜びになつたのである。そこが始めにも申す如く、秋の霜が強くて、草木の葉を充分に殺して置けば、春の花の榮へが豊かであるやうに、始めに我が機のつたないことを、充分に信じ玉ふて、いづれの行もおよび難き身なれば、とて

も地獄は一定すみかぞかしと、堅く我が機を信じ玉ひて、此地盤の上に立てられた他力の信仰故に、煩惱の黒雲が起る毎に、かゝる者をたすけ玉ふが佛智の不思議ぞと、歡喜の心こそ起れ、佛智を疑ふて、こんな者はたすかるまいと、信仰が根底から動くこと云ふことはないであります。此所まで來ねば、眞の信仰の妙味は起りません。人間として、恩愛の情のないものは一人もない、妻が可愛い、兒が可愛い、妻子のために自分の心が縛せられる。その恩愛繫縛の中にあり乍ら、從容として大慈照護の御恵みを喜び人生の勤めをして行くこと云ふは、他力の御慈悲なればこそ出来る事であります。

三。然るに、今この第四十條の御話を伺ふて見ると、蓮如上人

の御弟子がたは、機の歎きをしたのみならず、終には機の歎きから、佛智の不思議を疑ふた御方もあつたと見ゆる。そこを蓮如上人が御評決なされて、愛欲や名利は皆煩惱である。その煩惱を相手にして、こんな機さまでは参られまひと機のあつかひをするは自力雑修として嫌はるゝものである。信ずる外は何事も不必要ぢやと、信心爲本の宗義を御示し下されたのである。一寸文の上の御話をいたさば、「愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかづにいることをよろこばず、眞證の證にちかづくことをたのしめます」と云ふ御言は、「信卷」の中に出て居る、親鸞聖人の信後の御歎きの言である。此御言を篤と味ふて見ますと、私共のやうな、不法懈怠な者も、百萬の援兵を得たやうに、心強く感せ

られて、安心して大悲に乗托することが出来る次第である。愛欲と云ふことは、恩愛の欲性と云ふほどの意味で、妻子可愛いと云ふ愛情のことである。其愛情の限りのないことを海に喩へて、愛欲の廣海と申したことである。名利と云ふは、名聞利養と云ふことで、自分の名譽を得たい、利益を得たいと焦ることである。其名利を求むる心の紛紜と亂れて、取り直して見やうのない處を、大山の蹊路に踏み迷ふたことに喩へて、名利の大山に迷惑すると仰せられたものである。定聚のかづにいるをよろこばず、眞證の證にちかづくことをたのしめますとの一言は、私共に取て、深く味はねばならぬ所である。親鸞聖人も妻子があらせられたから、恩愛の情だけは、我等凡夫と同じことであらうが、淨土往生を飛び

立つほどに喜び玉ひ、此人世を去ることをば、破れた鞋を棄る如く、何の苦も無く御厭ひなされたかご申せば、決してそうでない如來の御たすけは信じたけれども、淨土往生の人数になつた事を飛び立つほどにも喜ばず、涅槃眞實の御證りに近づくことも、さほど嬉しく思召さずに、いつまでも此娑婆に執着するのは、我が身ながら歎かしい次第であるとの、信心已後の御歎きである。機は歎き玉へども、佛智の不思議を疑ふと云ふことは少しもなされぬ。機の歎きが、却て法を喜ぶの心を強からしむる因縁である。そこが、秋の霜が強いので、却て春の花が繁く附くのと同じことである。然るに蓮如上人の御弟子がたは、この親鸞聖人の御心を充分に會得することが出來ずに、親鸞聖人ですら、愛欲の廣海に

沈没し、名利の大山に迷惑して、淨土往生の近づくことを喜び玉はぬとすれば、我等の愛欲の海に溺れることの強く、不法懈怠にして、淨土往生を欣ばぬことは、比べ物に成つたものではない。聖人は雪の中に御やすみに成ても、尙如來の御恩を御喜びになつた。御流罪に御遇ひになつても、尙御恩のほどを喜ばれた。同じ喜ばれぬと申しても、聖人の喜ばれぬのと、我々の喜ばれぬのは程度が違ふ。聖人は、愛欲の廣海に沈没すると仰せられるけれども、御長男の善戀上人が、他力の信心に住せぬとて、七生の勘當を遊ばされた。恩愛の心が強いと申しても、切る所はちやんと御切りなされる。それ等の事柄に比べると、同じ恩愛に沈み、同じ喜び心が起らぬと申しても、聖人の御行狀と我等とは比較になら

ぬ。こんな事では、とても往生は出来まひ、いかに大悲の本願とは申せ、こんな機さまの悪人では、とても御たすけはあるまひと聖人の御歎きの言を問題として、御弟子方が色々に申し合ひをして御座る所を、蓮如上人が、唐紙ごしに御聞になつて、愛欲も名利も皆煩惱である。されば、其煩惱を相手にして、参られるの参られぬのご、機のおつかひをするのは、雑修である自力である。また佛智の不思議が信せられぬのである。悪人攝取の御慈悲が信せられたならば、そんな心配はいらぬ筈である。唯信心が肝要で其他の罪悪や煩惱の心配は無要である。仰せられたのであります。「信するほかは別のことなし」この仰せは、實に鶴の一聲で、信仰上の極意は此中に盡きて居ります。煩惱の黒雲に目がついて、

往生を危ぶむと云ふのは、一言で申せば、佛智の不思議が信せられて居らんのおや。佛智の不思議を信するほどの人ならば、善導大師の所謂、機の深信の門戸を通りた人である。罪悪生死の凡夫、出離の縁なきものと信じて居るから、今更ら恩愛が深い、名利の心が強いのご、そんなことで佛智を疑ふと云ふことはいないのである。然かし、よくよく思ひ廻らせば、この蓮如上人の御弟子の疑問は、直ちに今日の私共の疑問で、四百年の前に、私共のために、解決をつけて下されたものぢやと喜ばねばならぬ。「論語」の中に、「古への君子は己れの爲めにする、今の君子は人の爲めにす」と申してありますが、己れの爲めにするから、見聞する程の事が、皆自己の心の徳となるのである。人の爲めにする者は、

見聞する程の事を以て、自分のためにはせず、人に話す材料や人を笑せる種にするのである。是が道を聞くこと愈よ多くして、精神の愈よ墮落する所以である。今此第四十條の御話も、單に昔話とせず、私のために、早くから疑問を解決して下されたものぢやと、之を身に引受けて味はねばなりません。

四。一寸御話が横道にいるやうであります、やはり先刻の御話と關係があるから、此に申して置きますが、上杉謙信が、天文十六年、十八歳にして始めて兵を挙げました時に、越後の國柿崎に於て、敵軍を打破りましたが、勝ちに乗して追撃して、米山の麓まで参りますと、眠氣がさしたと云ふて、路傍の民家に入りて眠りました。家來の宇佐美定行が、枕下に参りまして、今追撃を

已めると云ふことがありますが、此機に乗して撃たねば、撃つ時はありません。頻りに諫めたけれども、謙信は、唯眠むたいと一言答へたきりで、高いびきで眠りてしまひました。家來の者共は、かゝる好機を逸することやあると、色々に歎いて居りました。が、謙信は耳にもごめず、高いびきでありました。一時間も熟睡して居ると、遽然として眼をさまして、敵軍、今は米山の嶺を越して、三分の一ほど下りつらん、いざ追ひ撃せんとして、螺貝を吹き立てさせ、自ら陣頭に馬を進めて馳せけるに、其勢ひ驟雨の天半より下り來るが如く、敵軍の半ば山路を下りたる所を、上手より一氣に攻め下つて、縦横に奮撃しければ、敵軍は一溜りもなく敗衄したと申すことである。人間は、唯眠るのは善くないが、活

動をおこすための熟睡は、尤も喜ぶべきものである。ナポレオンを撃破した英國の名將ウエルリントン將軍も、頗る熟睡する人であつたと申傳へて居る。眠る時にはよく眠る代りに、一度び鞍に據て兵を指揮する時には、精神が少しも亂れず、能く敵の動靜を察して兵を進退するから、全局の勝利を博することが出来たのである。それ故、遊ぶ時には善く遊び、眠る時には善く眠り、活動く時には、精力を傾注して活動くがよい。機の深信を爲す時には充分に我が機のつたないことを信するがよい。深く信じて置けば前後に於ていかほど恩愛の風波か起つても、煩惱の黒雲が起つても、それがため、心中の動搖を起さずに、却て、かゝる罪惡の我等を、たすけ玉ふ御慈悲の程を喜ぶことが出来る。秋の霜の強い

のが、春の花を繁榮ならしむると同理であります。「六要鈔」に存覺上人が、機の深信の下に筆を御下しなされて、「自力の効なきを知るに由て、偏へに他力に歸す、此信特に肝要也」と特筆なされてあります。深く玩味いたすべき事でありませう。

第八回 一日のたしなみ、一月のたしなみ

一。人間は、寢て居る時に思ふた事と、朝起き上がったて、ちやんと顔を洗ふてから、端座した時に考へた事とは、非常に異なるものである。特に悲みに沈むとか、愚痴の思ひに追ひ廻される時などは、夜中に色々の事を考へる。しかし夜が明けて、起き直つて思ひ廻せば、昨夜の思想は、誠に浮雲のやうなもので、取るに

も足らぬ愚痴であつた事が明かに成て来る。私が嘗て苦惱に沈んで、色々苦しみ悩んだ時に、晝の間は他の事に紛れて居るが、夜になると、一時に苦惱が攻め寄せて、色々の事を考へては、自分勝手に苦しんで居る。かやうな事が、三日も四日も續いて来ると、ますます神経が過敏になつて、心配せんでも宜い事まで、片ツ端から心配するやうに成て来る。或日の事、佛前に跪びいて、御勤めをいたして居る中に、春の雪が消ぬ去るやうに、何時の間にか、胸中の苦惱が消ぬ去つて、四五日來の自分の心が、我身ながら恥かしいやうに思はれました。我が心の涼しく成つた嬉れしさに、此事を傍の佐々木月樵兄に打明けると、君が申すには、「それちやから、朝夕二度の勤行は、餘程意味のあることである。夜

の中に、愚痴の煩惱に追ひ廻されて、浮雲のやうな思想につかまれて、自から苦惱に沈んで居る時に、朝起き直つて佛前に跪びいて勤行をすれば、如來の御慈悲を思ひ出すと共に、今まで他力の導きを忘れて、自分勝手に苦しみをして居た事が分り、自然に平和の光りが胸の中に指しこんで来る。また朝から夕方まで、人世の仕事に追ひ廻されて、欲の算盤をはちくやら、怒りの火炎を燃やすやらして、一日の生活に疲れ切て居る時に、如來の前に跪いて、夜の勤行をして居ると、いかにも我が身の淺ましい事が分つて来て、かゝる機までも漏らし玉はぬ御慈悲を思ひ出せば、いつの間にやら、如來の慈光に照されて、平和の生活に還り、心靜かに夜の枕に着くことが出来る。それで朝夕の勤行には、深い意味

のあることで、修養に心ある人に取ては、誠に大切なことぢや」と話して呉れました。それより以來は、反省の心の少ない私も、佛前に向ふ時は、時々我が身を反省すると同時に、如來の御慈悲に立ち還つて、私の自分勝手な苦惱を洗ひ去て貰ふ事でもあります。特に朝と申す時は、天地の氣も新たに、人の心も清み易き時でありますから、朝の勤行に於て、如來の御慈悲に立還るといふは、非常に大切なことぢやと思ひます。清澤先生が、「吾れ如來を念ずれば世に處するの道開らけ、如來を忘るれば、世に處するの道閉づ」と仰せられました。朝の勤行の大切な意味も、此所にあるのである。始終念佛を申して、如來の御慈悲を喜んで居る人には、朝夕の勤行に、左程重大な意味を持たぬか知らぬが、朝から

晩まで、人生の苦惱に追ひ立てられて居る人に取ては、頗る大切な意味ある事柄であります。

二 前年、佛蘭西の陸軍大尉ドレーフ氏が、國家の重要な機密を、敵國の人に漏らしたといふ嫌疑で、久しく牢獄に囚はれた事がありました。是は實際は冤罪で、ドレーフ氏に取ては、身に覺わぬ無かつた事でありましたから、終には晴天白日の身となりましたが、永の牢屋の生活は、君に對しては、誠に氣の毒なことでありました。當時、君が獄中の所感に、「夜が明け離れて、世上の婦人や兒供の、愉快らしく遊んで居るのを見ると、自分の妻子の事が思はれ、人が活潑に働いて居ると、我が身の不自由なことが思はれて、胸の中は苦惱を以て満たされる。世上の婦人や

子供を見ればこそ、こんな愚痴がこぼれもすれ。夜に成て、四面
 闇黒に閉ぢられて、人世の活動が、眼中から離れたならば、こん
 な苦痛はあるまいで、早く夜に成て呉れるやうにと、夜になるの
 を待ち兼ねて居たが、實際夜に成て、寂寥の天地と變じて來ると、
 外界の物は何にも見るぬが、精神上の活動が機敏に成て、我が身
 の不運な事や、妻子の行末などの事が案せられる。胸の中の苦惱
 は、風に吹き荒されたる海の如く、一波去れば一浪來り、一浪消
 ゆれば一波湧くと云ふ有様で、せめて外界の物が眼に見るなら
 ば、それに紛れて、これ程の苦痛もあるまいのに、四面闇黒で、
 寂寥の中に閉ぢられて居るから、思ひの波が湧き返へるのである
 早く夜が明けて、晝に成て呉るればよいと待つて居る。漸く夜が

明けて、世人の活動する姿が眼に入ると、亦も自分の不自由と、
 妻子の事が思はれて、悲哀の念を抑へることが出來ぬ。此上は一
 層のこと、早く夜に成て呉れて、暫時でも眠つたならば、しばし
 の苦痛でも免れるかと、夜になるのを待ち兼ねて、僅かに夜にな
 れば、再び寂寥の中に思案を始めて、來し方行末の事を案じて苦
 惱する。晝になれば夜を羨み、夜になれば晝を待ち兼ねるのが、子
 が獄中の生活である」とは、ドレーフス自身の告白である。いか
 にも獄中の生活が、眼の前に見えるやうである。此時ドレーフス
 氏は、果して何物を以て自己の心を慰めたか知りませんが、晝の
 生活に疲れて夜を待ち、夜の思案に疲れて晝を待つのは、私共も
 亦ドレーフス氏と同じことである。この苦惱の生活の中に在て、

如來の御慈悲に近づくのが、私共の、慰安の光りに出遇ふ唯一の方法である。清澤先生の、「如來を念ずれば世に處するの道開け如來を忘るれば、世に處するの道閉づ」と仰せられるは此の理由である。

三。然らば、如來に還れば、何故に苦惱を慰められ、世に處するの道が開けるのであるかご申すに、全體私共が苦しむのは、如來の仕事を盗むから起るのである。自分で定める事の出来ぬものを、自分の力で定めやうとするからである。佛に向つて求むべき事を、人間に向つて求めるからである。兄弟が同情を寄せて呉れぬ、親類が同情を寄せて呉れぬ、朋友や隣人が親切をつくして呉れぬと云ふて、人を恨み世を怨んで、我が身ほど不運なものはない

いと思ふて居る。然かしよく／＼考へて見れば、此の如き同情を人間に求むるのが既に誤りである。自分が第一に、兄弟や隣人に對して、同情をつくして居らぬ。然るに自分の出来ぬことを他人に求めて、他人獨りが不親切のやうに思ふて居る、苦惱の本は此處に在る。求められぬものを求めやうとするから、求むれば求むるほど苦惱する。然るに私の心の中を知りぬいて、罪惡の上に感みを注ぎ、眞實の同情を寄せて下さる御方は、阿彌陀佛ばかりである。向ふから灑いで下さる御慈悲に振りむかずに、人間同志の間に同情を求むるから、これが苦惱の根源となるのである。妻子が無事に生息するか、自分の死後に妻子の運命はいかに成り行くか、そんな事は、いくら心配しても、私共の定むべきものではない

い、一に如來の御導きに由ることである。如來の御仕事を盗んで来て、自分に定めようとするから、此に苦惱が起るのである。清澤先生は、「我れ生きん程は、先づ食物を以て妻子に分つべし、我れ死せん後は、妻子の運命は、一に如來の指導にまかすべし。如來はいかに加して、彼等に必要なるだけの衣食を給與し玉ふべし。彼等いかにしても衣食を得ざらんか、是れ如來が彼等に死を命じ玉ふ時なり。彼等は謹んで如來の命に服従せざる可らず」と申されました。唯口で申すばかりではない、先生の信仰が、實に此の通りであつたのである。此の如來の同情を忘れ、如來の指導を忘れて、他人に求め、または自己の力で人生の運命を定めんとするから、如來を忘るゝ時に、世に處するの道が閉づるのである。妄

念一たび開けて、如來に立還つた時に、私の案じ煩ふべき事ではなかつた、一に如來の御導きであるわいと、心が明白になつて來れば、此に平和の光りに出遇ふのである。

四。或る求道者の實驗談に、自分は寢ても起きても苦しくて、唯心中が不愉快である。いかに説教を聴聞しても、いかに信仰上の書物を読んでも、どうしても苦惱が収まらぬ。或日の事、祖師聖人の、「外に賢善精進の相を現することを得ざれ、中に虚假を懷ければなり」との御教訓を聴聞した時に、今までの苦惱が一時に晴れて、懺悔の涙と共に、御慈悲に立還ることが出来たと申すこととであります。此人は、何故に唯今の御言を聞いて、平和の光りを見出したか、其道行は告白せなかつたから、他人の御心の上は分

りませんが、私が丁度是と同じ實驗に出遇ふた事があります。それは、自分では自分の弱點を知り乍ら、それを塗り隠して置いて、善人である如く装ひ、道德者の如く飾つて居る。然るに他人が彼れ是れと、自分の批評をするに、それが非常に氣に障りて、幽鬱の雲に閉ぢられ、苦惱の淵に沈んで、表面を善人らしくすればする程、いよ／＼苦惱が増して来る。此時忽然として胸中に湧いたは、唯今の祖師聖人の御教訓である。「外に賢善精進の相を現することを得ざれば、内に虚假を懐けばなり」、表面に善人らしき賢者らしき相をするなよ、なせならば、其方の胸の底に、山ほどの虚假を積んで居るではないか、土人形に金箔をつけて、無理に綺麗に見て貰はふとするから苦しいのである。罪惡の心を罪惡と氣

がついて、如來の前にさらげ出して仕舞ふた時、惡人攝取とは、他人に對する呼聲ではなくて、此私一人のための呼聲である。他人は誹るかも知れぬ、しかし人間同志には同情を求めぬ。眞の同情者は彌陀一佛であるに、氣付かせて貰ふた一念から、苦惱の間は晴れ渡つて、活き／＼した生活に還りました。如來に立還れば世に處するの道が開けると云ふけれども、開けるとか開けぬとか云ふて居る間は、言の先きの争ひである、實際の處は、自分から苦惱に沈んだ時に、心靜かに念佛して、世に處するの道が開けるか開けぬか、是を實地に味ふて見ねばならぬ。親である、妻である、兄弟である、朋友であるに云ふけれども、心の蓋はまだ取れて居らぬ。夫は妻に云はれぬ事が澤山ある、親は子に打明けられ

ぬ事が澤山ある。今日は眞實の道づれと思ふて居た人が、明日は早や無常の風に吹き分けられるが世の習ひである。兄弟が多くて困る、親類が多くて交際費が入るのに困ると云ふ人も、精神上から云へば、人世の荒野を、獨り旅行をして居るのである。眞の相談相手が無い、眞の同情者が無い、寢るにつけ起るにつけ、苦惱の多いのは此譯である。「阿波の鳴戸」の物語を見ると、お鶴と云ふ少女が、遙々故郷の地を離れて、親を尋ねて獨り旅行をする。しかし獨り旅行をするにも、心には何か慰安を求むる所があるらしい、心に頼む所がなくては、事實上少女の獨り旅行が出来るものではない。作者近松氏は、この人心微妙の所を寫し出して、「同行二人としるせしは、ひとりは大悲の影たのむ」と書いてある。

少女は獨り旅行である、然るに肩にかけた笈摺には、たしかに同行二人と書いてある。一人の同行は、唯の人ではない、野宿をしても夜道をして、常に心の上に慰安の光りを與へて下さる御方である、即ち大悲の觀世音である。獨り旅行でも、同行二人であるとの信仰は、僅か十歳ばかりの少女に、海山越へてはるゝと親を尋ねる勇氣を與へたのである。如來に立還ると云ふことは、一人旅行の者が、二人旅行に成ると云ふ事である。そこで苦惱の多い、御慈悲を遠ざかり易い私共に取つては、せめては朝夕の勤行にて、如來に立還ると云ふことが必要である。今晚の「御一代記聞書」の御教訓も、此意味で拜讀いたしたいものであります。今から本文に移ります。

一。あかをの道宗まふされさふらふ。一日のたしなみには、あさづごめに、かゝさじごたしなめ。一月のたしなみには、ちかきごころ、御開山さまの御座候ふごころへ、まいるべしごたしなむべし。一年のたしなみには、御本寺へまいるべしご、たしなむべしご云云。これを、圓如様きこしめしをよばれ、よくまふしたるご、おほせられさふらふ。

五。蓮如上人の御時代に、越中の國、赤尾と申す所に、彌七と申す人がありましたが、深く蓮如上人に御歸依いたし、生涯念佛申して、御慈悲を喜ばれたと云ふ事でありすが、此の彌七が、

老年に及んで、髪を落して、僧侶のやうな相となり、法名を道宗と申されました。この時代には、俗人でありながら、僧侶のやうな相になることは、随分多くあつたと見えて、この「御一代聞書」の第一條の下にある、勸修寺村の道徳も、やはり此種の一人であります。「論語」の中には、孔子の御言が最も多く載せてあるけれども、中には、御弟子方の善言美行を處々に載せてあります。この「御一代聞書」は、蓮如上人の「論語」とも申すべきもので、其大部分は、蓮如上人の言行を記してあれども、中には、御弟子や同行方の、善言美行をも記してあります。この道宗の話が、其一例であります。たしなむといふ言は、色々の意味のある言で、人を窘しめることを、たしなめてやると申すことがあります。こ

れは窘しむるの意味である、また和歌の道をたしなむなど申す時は、和歌を好むと云ふ意である。今まで大酒を飲んで居る者に對して、ちとたしなんだがよいわいなと申す時は、酒を禁止する意味である。また髪を亂さずに、ちやんと修めて置くは、女のたしなみである。云ふ時には、心懸けと云ふほどの意味である。まだあるか知れませんが、一寸數へて見ても、今擧げた四種類がある。今この道宗の言はれた意味は、油断なく心にかける方の意味であります。如來の御慈悲の信せられぬ、未安心の人ならば、ほかに信心を得る道はない、如來の御慈悲に近づくのが第一番である。苦惱の多い人ならば、ほかに苦惱を離れる道はない、如來に立還るのが第一番である。そこで、一日の心懸けには、朝の勤行にか

かさじと、たしなむことが大切である。何事も朝の出かけが大切で、朝の中に腹が立つと、一日中不愉快に暮さねばならぬ。朝の仕事が後れると、一日中の仕事皆後れる。朝の中に平和の光りを見出せば、其日一日心うれしく日暮をすることが出来る。そこで、一日のたしなみには、朝の勤行をして、如來に立還ることが大切であります。それから蓮如上人の御時代には、御開山様の御影は、中々在家には御下げがなかつたので、容易に御開山様に御禮をとげることは出来ませぬ。若し隣村でも、御影のある所があるならば、せめて一月に一度位は參詣して、他力易行の御法を、御示し下された御恩を偲べよと申すのであります。御本寺ごあるは、御本山の事である。御本山は遠方のご故、毎月參詣する事

は出来ぬが、一年にせめて一度なりとも、参詣せんと、其事を心がけて、油断すなと申すことでもあります。圓如上人と申す御方は蓮如上人の御孫公に當らせ玉ふ御方で、八十通の御文を、一つにまごめて下さつたは、此御方であると承つて居ります。御年三十二歳にて御隠れに成つたと申すことである。道宗の申した事が、いかにも難有い、よい心懸けちやと思召されたから、圓如様きこしめしおよばれ、よくまふしたると仰せられたのであります。赤尾の道宗の申された意味は、信心決定の上からは、佛恩報謝を疎略にしてはならぬ。そこで、一日のたしなみには、朝の勤行をかがすな。一月のたしなみには、祖師聖人の御影に御禮を遂げよ。一年のたしなみには、御本山に御禮を遂げよと申されたのであり

ませう。しかし、いまだ御慈悲に安心の出来ぬ人も、安心は出来たが、時々煩惱の黒雲が出て、苦惱を起すから困ると云ふ人も、共俱にこの道宗の教訓を、蓮如上人の御教訓同様に心得て、御慈悲を離れぬやうに、如來に立還ることを忘れぬやうに、たしなみ深い日暮をいたしたいものであります。

第九回 信心になぐさむ事

一。トルストイ氏が、「救ひの道は内心に求めよ」と云ふことを申されまして、其名著「懺悔談」の中に、一の面白い實話を記載してあります。露西亞の或る劇場に於て、數千の客人が群集して演劇を見て居る最中に、突然として場の片隅から火事が起りました

た。そら火事ぢやと云ふや否や、看客は總立になつて、大浪の打寄するが如く、雪崩の落ち来る如く、凄酸き悲鳴の聲を上げて、出口の門に推し寄せました。群集は、我れ一と先を争ふて、門の扉に推し寄せましたが、一向に門の扉があかぬ。推せば推すほど門は嚴然として閉つて居る。此時の群集の焦慮の有様は、喩ふる物もないと云ふ有様である。忽ちにして、群集の中より一人躍り出で、大勢の人に向つて、聲高く警告して申すには、「諸君、生命が惜くば、予の一言を聴け。この門の構造は、扉が内面に向つて開くやうに作られてある。諸君が若し外面に推すならば、唯嚴重に閉まるのみで、斷じて救ひの道は開かれぬ。諸君、唯二三歩を退けよ、門扉は無造作に開かるべし」と、此聲を聴くや否や、群

衆は、生命が惜しさに、救への如く二三歩退きました。此時忽然として門扉は開いて、數千の見物人は、此處から救ひ出されたと申すことである。

二。外に推して開く門ならば、外に向つて推すのが適當なる方法である。しかし内に開くやうに作られたものならば、之を内に推さねばならぬ。「救ひの門扉は、内面に向つて推せ」とは、トルストイ氏に初まつた教訓ではない。法然上人、親鸞聖人、蓮如上人、其他古の聖賢の教へは、皆救ひの道を内に求めよとの教訓である。然るに世の人は、人生問題の火事に出遇ふと、其火事場を遁れ、一日も早く安心の境界に往きたいと思ふて、頻りに門の扉を外に推す。いかやうに外に推して居るか云ふに、我が心の方

を修めずに、外界の物に由て安慰を得んとして居る。トルストイ氏の自白に由れば、自分は一代の文學者として世の中に立ち、人間の稱讃を受くるやうに成つたならば、さぞや安心の境界に至るであらうと、一生懸命勉強して、三十前後にして、已に露國に於て、有名なる文學者と成つた、豫定通りに世上の稱讃を受ける身となつた。然るに安心は聊かも得られぬ。そこで思ひ直すには、此上は、善良なる妻を持ち、愛らしい兒供を得て、温かき家庭を作るならば、定めて安心が得られるに違ひはないと、家庭の方面に心を向けましたが、自分の理想通りの妻を求め得、愛らしき兒供も出來たが、更に安心は得られぬ。安心が得られぬのみならず、妻や兒供が出來ると、一層前よりも苦惱が増すばかりである。是

に於てトルストイ氏は、初めて夢がさめて、救ひの道は内に求めねばならぬと云ふことを、自覺いたしたと云ふことである。君の崇高なる宗教的生活は、是から始まつたのである。

三。人生問題の火事に出遇つて、救ひの道を外に求めんとしたは、ひとりトルストイ氏のみではない、今日の私共が、大抵は皆此道筋を通つて居る。高位高官を得て安心したいと思ひ、金錢を貯へて、それで安心したひと思ひ、別荘や衣服を作りて、世人に羨まれるやうになつて、それで安心したいと思ひ、日々門の扉を外に推して居る。しかし乍ら、我れの求むる處は、また同じく他人の求むる處である。我れが金錢を求むれば、他人も亦之を求むる。我れは得んとすれども、他人は容易に之を與へぬ。僅かに金

錢を得れば、之を失はんことを懼れる。位を求め、別荘を求め、衣服を求め、名譽を求め、千辛萬苦の末、僅かに之を求め得れば、今度は之を失はんことを懼れる。推しても推しても、救ひの門戸は開かれぬ。終には門の開かぬ中に、人生問題の火燭の爲めに、焼き殺されると云ふ人は少なくない。今日、新聞紙上に多く見る所の、落膽のため、失望のため、事業失敗のために、頻々として死を求むる人の現はれるのは、皆この門の前に焼け死する人である。安心を求めんとするのは宜いが、門の扉を外に推すのが間違ひである。推せば推すほど苦惱を増し、終には人を怨み世を怨んで、病床の中に月日を送ると云ふ有様にならねばならぬ。

四。親が我娘を嫁にやる時に、衣服を調へ道具を調へ、金の時

計や、金の指環をまで準備して、何一つ不足がないやうにして、これを他人の家に遣はす。しかし乍ら、精神上の問題は少しも顧みぬ、心の中に信仰の嫁入り道具をば調へてやらぬ。屋根瓦の缺け目から雨は漏り出すやうに、嫁した後に苦悶の起るのは、時計が不足から起るのでもなく、衣服が不足から起るのでもなく、精神上の道具の不足から起るのである。自分の心の上をば顧みずに夫に親切を求め同情を求め、姑に親切を求め同情を求め、親類に親切を求め同情を求め。しかし乍ら思ふやうには求められぬ。却て夫や姑の方から、嫁の方に親切や同情を求めて居る。嫁が出来たならば、炊事もして呉るであらう、掃除もして呉るであらう、老人の世話もして呉るであらう、家計の手助もして呉る

であらうと、先方からも我と同様に同情を求めて居る。先方から求める位であるから、嫁の求める處を、充分に満足せしむることは出来ぬ。是に於てか、苦惱の雨は漏り始める。何處から漏るか精神上の屋根瓦の缺け目から漏るのである。其苦悶を慰めんがために、ます／＼門の扉を外に推す。音樂會に往て、音樂を聴て一時の心を慰めんとする。または海岸や温泉に往て、この心を安んぜんとして居る。しかし乍ら、一時は苦悶を忘れても、酒の酔と同じやうに、直ぐに醒めて仕舞はねばならぬ。たとひ一時の快を得るにしても、長く海岸や温泉に往て居る譯には行かぬ。家計は思ふやうに行かず、小言は起る、外に推せば推すほど、救ひの門は開かれずに、ますます／＼嚴重に閉まるのみである。

五。たとひ今までは、外に向つて門扉を推したにしても、一度先覺者の警聲を聴き、「救ひの門扉は内に推せ」この聲をきいたならば、私共は此に心の向きを換へ、内面に如來の慈光を拜まねばならぬ。私の身に取て、必要なるほどの物は、如來は必ず給與して下さるのである。此世に於て、如來の恩寵に包まれて居るのみならず、未來後生の大問題も、如來の御手に引受て下さるのである。この御慈悲が、眞に我心に戴かれたならば、人を責むるの暇はない、他人を是非するの暇はない。唯我身の仕合せを喜び、如來の恩寵の限りなきを感謝するばかりである。信心と云ふことは、この親の御慈悲に氣づかせて貰うことである。光りに遇へば始めて影の暗い處が見ゆる。如來の御慈悲に出遇ふて見れば、我

心の罪惡がよく見ゆる。罪惡が見ゆる下から、この罪惡深重のものを、正客として憐み下さる如來の御慈悲が難有い。腹が飽れて居る人は、他人に求むる必要がない。如來の御慈悲に満足して、充分に腹が飽れて見れば、これだけで既に充分である。私の身に今現に與へられてないものは、私に取て必要のないものである。私に取て、是非必要なものならば、如來は必らず與へて下される。如來の與へて下されぬものを、強めて求めんとするは、如來を侮辱するものである。清澤先生の御話に、「我等は、如來の賦與し玉へる物に由て満足せざる可らず。之を他人に求むるが如きは、卑なり陋なり。如來を侮辱するものなり。如來は侮辱せられずとも、汝の苦惱を奈何せん」と申されましたが、私共が世に處する

に就て、一日も忘れてはならぬ教訓であります。如來の賦與に満足する事になれば、他人を怨む必要もなく、人を羨やむこともありません。已に此世に在り乍ら、如來の恩寵の下に生活し、未來後生までも、私共を護つて下さるこの御誓ひである。惡趣を脱して極樂に生れさせんとすの御願ひである。此御慈悲に満足して世を送るのが、信心を得たる人の生活である。

六。されど私共の胸の中には、懼るべき煩惱が潜んでをる。一度び煩惱の黒雲が漲れば、求む可らざるものを求め、怨む可らざるものを怨み、苦悶の淵に沈むことがある。しかし一度び如來の御慈悲を信じた人は、心の中に信心の浮袋がついて居る。浪の底に沈まんとする側から、浮袋は私共をたすけて、直ちに浪の上に

浮ばせて下される。南無阿彌陀佛を念佛して、心の上に如來の御
 慈悲を思ひ出せば、人に求め、人を怨む事が、私の過ちであつた
 事が直ぐに分る。私は如來の賦與物に満足すべきである。之を他
 人に求むるは、如來の御慈悲を侮辱するものである。貧に苦しむ
 は、人生の恃む可らざるを知らせて下され、涅槃常住の御證りの
 最後の安住處たることを知らせて下さる御方便である。病の床に
 臥するは、人生の當てにならぬことを知らせて下され、唯南無阿
 彌陀佛のみ、如來の御慈悲のみが、永劫の住み家であることを知
 らせて下さるのであるわいと。かやうに心の戸扉が開いて來ると
 貧乏の中にも喜んで日を送り、病の中にも、我身の仕合せを感謝
 して日送りをする事が出来る。今まで外界の物を求めて居る間は

いかにしても安心を得られなかつたものが、如來の御慈悲を信ず
 ると共に、門の扉は自由に開いて、獨り生活をする時にも、夫婦
 相並んで日暮しをする時にも、病床にも貧苦にも、夜曉けの枕の
 上にも、旅路の秋の雨にも、如來の賦與し玉へる物に満足し、罪
 惡の重荷を引受けて、未來後生を安養の樂土に導き玉ふ御慈悲を
 喜んで、感謝の日暮をして行くことが出来る。救ひの門扉は常に
 開いて居る。かほど尊い御慈悲であるのに、今日は仕事がある
 ので聽かれぬ、明日は要用があるので聽かれぬと、人世の事はか
 りに走り、門扉を外に推すのが私共の生活である。しかし乍ら、
 此に於て私共は大に反省せねばならぬ。古人の語に、「學問をした
 いけれど、暇がないと云ふ人は、暇があつても學ばぬ人である」

と申してあります。人生が忙しいで聞かれぬと云ふならば、いつ忙しくない時か来るのであるか。忙しいと云ふのは、門扉を外に推すから忙しいのである。一度び如來の呼聲に眼をさまし、門扉を内に推すならば、此に平和の光りを見出し、此に安心の泉に出遇ふ事が出来るのである。蓮如上人の御化導は、此に深く御注意下されてある。

一。我心にまかせずして、心を責めよ。佛法は心のつまるものかとおもへば、信心に御なくさみ候と仰せられ候。

一。法敬坊、九十まで存命さふらふ、このごしまで聽聞いたしさふらへごも、これまでご存知

たるごごなし。あきたりもなきごごなりごまふされさふらふ。

七。我が心にまかせて置けば、花見に行き、紅葉見に行き、人の悪口を云ひ、愚痴をこぼして居る暇はあつても、佛法を聽聞し如來の御慈悲に心を傾ける暇はない。「我心にまかせずして、心を責めよ」とは、何と云ふ尊嚴な御教訓であります。今日の私共の急所を突いて下された御教訓である。孔子の門人顔回が、一日孔子に向て、いかにしたならば、仁を行ふことが出来ますかと御尋ね申したらば、孔子の御答へに、「己れに克つて禮に復れ」と申されました。己れに克つて禮に復れと云ふは、我儘な心が起つたならば、それに打克つて、禮儀に復れと申すことである。蓮如上人

の「我心にまかせずして、心を責めよ」この御教訓と同じ意味であります。今日の青年が、佛教の話を聞いて見たいが、仲々難かしくて分らぬと云ふて、終には之を棄て、仕舞ふ人が澤山あります。三味線や笛のやうなものを稽古しても、初め少しばかり學んで、六つかしいからと云ふて已めるならば、是等の藝に熟達すること出来ぬ。糸竹の如き小さな藝でもさうである。況んや心靈上の問題に指を染める人が、一度や二度で、六つかしいから已めると云ふなら、いつ熟達する時がありませうか。「我心にまかせずして、心を責めよ」この御一言の中には、蓮如上人の涙が含まれてあるたい厳格な御教訓であるのみでなく、非常に親切ふかい御手引であります。佛法と云へば、何か陰氣な話でもして、心のつまるも

のと心得て居る人が多い。しかし乍ら、眞に如來の御慈悲を味ふて見れば、心のつまる處ではない、人生の苦惱に閉ぢられ、自殺したいと思ふ程の人も、この御慈悲を信じさせて貰へば、精神上に蘇生することが出来るのである。人生苦惱の火焔が、いかほど推し寄せて來ても、直ちに心の中に救ひの門扉が開くのである。何故に人生に苦しむのであるか、求めるから苦しむのである。他人を責めて、我身を反省せぬから苦しむのである。煩惱に攻め立てられ、罪惡に包圍せられて居るから苦しむのである。如來の御慈悲を信する人は、如來は私に必要なるものを與へて下さることを信じて居る。私の煩惱罪惡に就ては、如來は凡ての責任を負んで下さることを信じて居る。一度び此深重の御慈悲に思ひ至れば

喜ぶなど云はれても喜ばずには居られぬ。「信心に御なぐさみ候」
 とは、則ち此所の味ひである。しかし乍ら、唯信心になぐさむと
 のみ云ふては、空論に流れて、事實に疎いやうである。そこで、
 「御一代記聞書」の作者は、この蓮如上人の御化導と相並べて、
 御弟子法敬坊の事を記したのである。法敬坊が九十歳まで存命し
 聞いても聞いても、御慈悲に聞き飽くと云ふことはない。「聞きた
 びにめぐらしければ子規、いつも初音の心地こそすれ」と云ふ風
 情で、今後は最早や聴くまいと思ふた事は一度もない。幾度び聞
 いても、聞き飽きのない御慈悲ちやど喜ばれたと申すことである
 蓮如上人が、佛法は心のつまるものでなく、信心になぐさんで、
 苦惱多き世の中に、喜びの光りを見出す道ちやど仰せられました

が、それが唯の空論ではない、御弟子法敬坊の實感に照らして見
 れば、疑ひもなき真理である。それ故に、今茲に、蓮如上人の御
 化導と、法敬坊の感想と、並べ示してあるのは、大いに意味のあ
 る事と窺はれます。

八。「信心になぐさむ」と云ふ事に就て、一言申して置きたい事
 があります。維新の初め、慶應三年の事でありませんが、勤王の志
 士が、豊前の馬城山に旗擧げをいたして、徳川幕府の出張所たる
 日田の代官所を攻めんといたしました。此警報が代官所に達する
 や否や、代官以下の諸官吏は、秋風に木の葉の散るが如く、皆悉
 く分散してしまいました。是に於て日田の代官所は、全く無政府
 の有様になつて参りましたが、明くれば慶應四年、即ち明治元年

で、鳥羽、伏見の一戦で、勤王の軍が勝利を占め、初めて明治政府が創立せられました。此時、今の赤十字社長を勤めて御座る松方伯が、日田縣知事となつて、代官所の跡に参りました、其時分此日田の町内に、千原夕田と申す人がありました。廣瀬淡窓先生の門人で、道を信すること篤く、至つて慈悲深い人でありました町内や近村の中に、貧民や、または親を養ひ兼ねるやうな婦人などある時は、夜中潜かに米錢を分與して、其意中を慰めてやつたと申すことである。それであるから村民等も、眞の親を慕ふやうに尊んで居たと申すことである。家は其近邊にては古い豪家で、二三十萬の身代を有して居りました。然るに松方伯が、日田縣知事となつて参りました時に、千原氏の事を悪しざまに申立て、松

方伯に訴わた者がありました。其言ひ分はかやうである。日田の代官時代には、民間から代官所に收むる租税は、一度千原家に集め、それを一まごめにして代官所に收めて居たのちやそうであります。然るに馬城山に勤王の志士が起つて、日田の代官が没落した時に、民間の租税は、其儘千原家に残つたので、畢竟千原家の富の過半は、民間の租税であるから、これを處分せよとの申分があります。聖賢の道を信すること篤く、慈悲深い千原氏に於て、そんな亂暴な事がある筈はないけれども、高木は風に吹かるとの世の諺の如く、家の富貴であるのを、世人に惡まれて、思ひもよらぬ奇禍にかゝつたのであります。新任早々の松方伯は、直ちに千原氏兄弟を捕縛して牢獄につなぎ、事の實否を確かむる積りで

ありました。其時千原夕田氏の獄中の詩に、「窮不尤人豈怨天。唯
 悲老母獨潸然。永山夜雨蕭々夕。隔壁弟兄愁不眠」と申すのがあ
 ります。「窮して人を尤めず豈天を怨みんや、唯悲む老母の獨り潸
 然たるを。永山の夜雨蕭々の夕、壁を隔て、弟兄愁へて眠らず」
 と讀むのであります。論語の中にも、「君子は天を怨みず人を尤
 めず」とありますが、千原氏が、思ひもよらぬ奇禍にかゝつたは、
 實に一家の不仕合せではあるが、天を怨むこともなく、人を尤
 めることもない、唯一の恃む所は、我が心の中に、官金を私して
 居らぬと云ふ誠心である。此の誠心は、獄中に於ては、千萬人の
 友達よりも強い味方である。我身の上には、別に怨むことも歎く
 こともないが、唯老年の母親が、ひとり我が屋に残されて、さぞ

や歎き玉ふことであらう、唯是ればかりが、悲歎の種である。此
 老母の身の上を思へば、蕭々と降る秋雨の夕に、別室に捕へられ
 て居る兄弟は、壁を隔て乍ら、一語もかはしはせぬが、互に愁心
 にまごはれて、秋の長夜を眠らずに明かすと云ふ詩の意味であり
 ます。此詩を一度び吟誦いたせば、千原氏の心の中が、いかに正
 直潔白であるか、分ります。其誠心の天に通じたるにや、村民ご
 もは、千原氏の冤罪を、筑前の太宰府の天神に訴へると云ふて、
 老人も兒供も、互に手を引き合ふて、日田から十五里ある太宰府
 に向つて、參詣を初めました。其人影が、絡繹として數里の間に
 續いたから、松方伯は大に驚き、何事が起つたのちやど、幕僚を
 して取調べました所が、千原氏の冤罪を訴へるがために、筑前の

太宰府に、村民が徒足参りを初めて居ると云ふことである。それを聞くや否や松方伯は、千原氏の取調べもいたさず、即日縛を解いて家に歸らせ、一方村民を慰諭して、徒足参りを已めさせたこと申すことである。

九。自分の方が無理なことをして、それが爲めに不幸に陥つても。天を怨み人を怨むが人情である。然るに千原氏が、一時の奇禍にかゝつて、天を怨みず人を尤めず、泰然として獄中に坐して居た所は、心に信ずる所ある人は、不幸災難の中にも、慰むる所があること云ふ證據である。法然上人は、流罪に臨ませられて、「源空たとひ死刑に行はることも、更に變ず可らず」と仰せられ、親鸞聖人は、雪の中に御休みになつて、宿をかさぬ人を、怨み玉はず

に、「彌陀の五劫思惟の願をよく々案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」と御喜びあらせられた。信心は心のつまるものではなくて、心のなぐさむものちやこの御思召は、實に蓮如上人の實驗の上の御言であると思ひます。

第十回 妻子ほど不愍なるはなし

一。京都から三里ばかり北方に、岩倉村と申す村落があります。青山流水の間に村が開けて、極めて閑静な地であります。唯た風景の趣味があるのみでなく、我國の歴史上に、種々の關係のある處で、遠くは南朝の名臣藤原藤房の隠遁せられし寺もあれば、近くは明治維新の際、岩倉具視公の幽居せられた古跡もあります。

エマルソンの教訓に、「思想は即ち活動なり」と申してありますが人間は唯四方に奔走するのみが活動ではない、静かに思想を凝らして、物の本末始終を考へて置くのが、即ち大活動の基であります。岩倉公が此村に幽居せられて居た時分に、静かに世の成行を考へて、維新改革の腹案を作つて置かれましたが、慶應三年十二月に、朝廷の改革案が行き惱んで、如何に處置してよいか、裁断を下すに苦しんで居る時に、急に岩倉公を朝廷に御召しになりましたが、公は其時、大きな袋を抱いて禁中に参内し、其袋の中より、かねて岩倉村幽居の砌り、充分に考へて置いた改革案を出した爲めに、一朝にして維新の大改革が定まつたと申すことでもあります。これが名高い慶應三年十二月十日の大改革でありまして、

この改革が、あまりに驚天動地の大改革で、徳川將軍の政權を、根底より奪ひ去つた爲めに、終に僅か二十日ばかりを経て、慶應四年正月四日からの、鳥羽伏見の戦争と成つたのであります。

二。かう云ふ古跡のある處で、風景にも富んで居りますから、今より十餘年前に、一度此地に遊んだ事がありました。今年も亦因縁あつて、此地に遊ぶことが出来ました。因縁と申すは外でもない。此岩倉村に精神病院がありました。其院長を勤めて御座る土屋榮吉と申す御方は、京都醫學專門學校の出身で、佛教に因縁厚い人であり、且つ病院内の人々にも、他力信仰の御話をきかせて、精神上の開墾を計るといふ主義でありますので、今現に信仰談話を聞くために、解脱堂といふ講堂すら建築中であります。

右の次第であるから、晩秋の紅葉見物をかねて、是非に一度病院の参観に来て呉れよとの御案内でありますから、去る十二月五日彼地に参つて、親しく参観いたしました次第であります。三本樹を東に渡つて、鴨川の堤防に沿ふて、北に進むと二里餘にして、青山紅葉の間に、隠約たる建築物が見えます、是が即ち精神病院である。私は明治二十八年の十月に、此地に参りました時は、形ばかりの病院でありましたが、其後火災を経て、今の處に位置を改め、宏莊な建築を致して、全く面目を改めて居ります。病院は西手の青山を背面にし、山の斜面を利用して、一層、二層、三層と次第に病舎を建築してあります。そこで病舎は樹林に圍まれ、しかも位置が高くて、空氣の流通が宜しく、前面には比叡鞍馬の諸

山を眺めて、頗る景勝の地を占めて居ります。院長の御紹介に由て、一時間ばかり信仰上の御話をいたしました。大體の趣意は、吾人の闇黒なる精神の上には、如來慈光の提燈を持たせて貰はねば、人世の行路は進み難いと云ふ趣意で、私自身が、人世の行路に行き悩んだ時に、自分の學問も知識も間に合はず、唯如來の御慈悲のみが、眞のたよりとなつて、一道の光明を見出した事などの、懺悔談をいたしました。話のすんだ後で、院長の案内に由て山の斜面を登つて、一層、二層、三層と次第に患者の室を参観いたしました。たしか此時は、八十餘人の患者があつたやうに記憶して居ります。青年もあれば婦人もある、學生もあれば教育家の妻もある。其病氣の原因を承つて見れば、實に同情に堪へないも

のがある。

三。院長の御話によると、青年の精神病者には、殆んど同一の逕路がある。一には一人息男であること、二には其在學した學校が、二回も三回も變つて居ること、三には音樂を弄ぶこと、此三箇條が具備して居ると云ふことで、是は教育者に取ても父兄に取ても、大いに注意すべきことであります。何故この三箇條を具備して居るか云ふに、一人息男は、其父母たるものが、愛情過度のために、其兒の言ふがまゝ、爲すがまゝに育てるから、其兒の精神は、少しも修鍊せられずに、次第に放縱になる。それも家庭の中に居る間は、父母も婢僕も、其言ふがまゝをさせるから、左程精神を痛むることも少ないが、一度び我家を踏み出して、學校

生活に移りますと、學校の規則は、一人息男でも三人兄弟でも、試験の問題は同じものを課する、規律は同じ規律に服従せしむる雨天や雪中に行軍しても、一人息男のために、特別に便宜を與へると云ふ教育法はない。そこになると、家庭に於て、多少身體や精神の修鍊せられてある人は宜いが、全く放縱に育つたものは、究屈で究屈で、とても學校生活が出来ぬ。そこで其學校を退學して、他の學校に入學する。他の學校とて、規律や試験は同じことである、此處にも長く留まることが出来ぬ。更に去て他の學校に移る、是が學校の變はる理由である。學校は變はる、歳は進む、同級生や友人は成功しても、自分ひとり成功せぬ。氣がいらつて来る、思ふやうにはならぬ。社會の人は譽めて呉れぬ、父兄ま

でがそろく愛想をつかして来る。親鸞聖人が、「凡夫の慈悲は末が通らぬ」と仰せられるが、最初は可愛い一方で、言ふがまゝに任して置くが、十八九歳にもなつて、放縦生活が續いて来ると、先きの愛情は變じて、いつの間にか愛想がつきて来る。學校は失敗する、進むべき方向は定まらず、愛想をつかされて、肝癢が昂進して来ると、終には精神に異状を呈して来る。今一つ音楽の趣味を有して居ると云ふのは、精神病に罹つた息男を、父母が病院につれて来た時に、其経歴や嗜好を尋ねると、大抵は其兒に音楽の嗜好あることを申出でる。しかし醫師の方で調べて見ると、別に音楽に秀でたる才能もめられず、よしや音楽をやらせても、秀絶なる音調を出しはせない。畢竟するに、これも放縦生活の一

端で、他人が音楽をするのを見ると、誰れしも音楽をやつて見たい位の心は起る。これは音楽の美に打たれたる人の常情である。然るに如何せん、通常の人に在ては、楽器を買ふべき資財もなく之を弄ぶべき閑暇もない。しかし乍ら一人息男に至つては、楽器がほしいと云へば、親は云ふがまゝにそれを許すから、これが音楽に因縁のある所以であらうこの事である。これは固より此病院に於ける患者に就ての觀察であるから、一般の患者が其通りであることも決定は出来ぬが、先づ十人の患者中、八九人までは、今の三つの徑路を有して居るのを見れば、殆んど眞理と見て誤りはなからうと思ひます。

四。管茶山先生の御話に、富貴の家に生れた人は、幼年の時か

ら、氣儘に育つ、そこで少し氣に入らぬ事があると、直ちに茶碗を取て投げつける、それを彼れ是れと注意すれば、直ぐに蒲團を被つて寝てしまふ。それを親や女中が往て氣嫌をどる、此やうな生活を、五年十年と續ける中に、完全なる放縱性に成り上つてしまふ。これが「放縱の心を養ふ」と云ふものである。孟子が、「我れ能く吾が浩然の氣を養ふ」と云ふてあるが、其養ふと云ふ意味が分らぬならば、富貴の家に生れた人の、放縱性を養ふことに就て考へて見れば、其養ふ意味がよく分る。善心を養ふか悪心を養ふか、其養成する物柄こそ變れ、養ふと云ふこと丈は同じことである。氣隨氣儘に流れて行くのを、親や女中が氣嫌をすかして、益す放縱の心を養ひ上げる。浩然の氣を養ふと云ふも、養ふ意味

はこれと同じ事であるから、日常の生活の中に、温厚に導き、堅忍に導き、悪い枝が差し出たり、花に蟲でもつくならば、剪で之を切り取て、善心を養成すれば、終には完全なる浩然の氣と成て仰いで天に愧ぢず俯して人に愧ぢずといふ位置に進むことが出来る。御話になつたと申すことであります。管茶山先生の御話は孟子の浩然の氣を養ふと云ふに就て、門人達が、其養ふと云ふ意味が分りかぬるから、其反對の悪心を養成することを例に擧げて分り易く御話しになつたものである。今の精神病院長の御話は、醫學上心理學上からの御話であるから、其觀察の方面は全く違ふけれども、其結論に至つては、二者共に符節を合するが如くである。人の父母となり、人の師匠となる人に取ては、實に心得て置

かねばならぬことである。また婦人の一患者の身の上を聞けば、一層哀れである。この婦人は、縁あつて一教育家に嫁した、嫁するの間もなく、夫の持つて居た悪性の病氣が、直ちに妻に感染した。其病毒は上騰して頭腦を刺撃した爲めに、早くも腦髓に缺陷を生じて、普通の作用をなし兼ねるやうに成て居た。然るに家庭の問題や人生問題が湧起して、唯さへ弱い腦髓を刺撃したから、此に全く腦の順調を失して、完全なる精神病者と成つたと申すことである。この婦人に取ては、因縁とは云ひ乍ら、眞の奇禍である。いかに結婚前に、家の系統を聞合せたとして、夫になる人が秘密の病氣を持つて居ることが分るものではない。それを知らずに嫁したのは、確かにこの婦人に取て一生涯の慘事である。しかし夫人の

みでなく、其夫たる人も亦確かに不幸である。一方に於ては、教育者と云はれて、世の尊崇を受け乍ら、自分の心の中には、我れ故にこそ、妻を生涯泣かせもすれと思へば、不便でもあらう、自分の心もさぞや悩むことであらう。世の人を教育することは、固より大切なことである。しかし世の人を教育する前に第一に我が妻子を教育するが、尤も大切な事である。しかし妻子を教育する前に、我身を教育するが一層大切である。運如上人の御教訓は、此處に深い意味があるのであります。

一。わが妻子ほど不便なることなし、それを勸化せぬは、あさましきことなり。宿善なくはちからなし、わが身をひこつ勸化せぬものがある

五。「わが妻子ほど不便なることなし」この一語は、實に人間の内心を寫し出した寫眞である。しかし眞實不便であるならば、それを愛するに道を以てせねばならぬ。姑息の愛は、害にこそなれ決して爲めにはならぬ。衣服や別荘をそろへてやるも、妻子を愛するには違ひない。しかし乍ら、エビクタタスが云ふやうに、浮世の稱讃には浮世だけの價値がある。衣服が美麗である、別荘が華麗である、いかに浮世の人に讃められたとて、それが妻子の徳にはならぬ。精神上の苦悶に對して、衣服や黄金は之を救済して呉れぬ。精神上の闇黒は、精神上に光りを見出すまでは、決して晴れるものではない。されば教育の本義から云へば、世間の人

を教育する前に、先づ我が妻子を教育せねばならぬ。妻子を教育する前に、先づ我身を教育せねばならぬ。宗教の本義から云へば他人に信仰を勧むる前に、先づ我が妻子を教化せねばならぬ。妻子を教化する前に、先づ我身が信仰を得ねばならぬ。「二十四孝」の中に、慈悲藏が我兒を竹籤のほとりにすてる時に、愛兒を抱へて泣き乍ら、「兒を棄る籤はあれど、身を棄る籤はなし」と申す處があります。我身はよく／＼可愛いものに見えます。また平の知盛は、一の谷の戦ひが敗れて、源氏の兵に追ひかけられた時、知盛の一子知章が、僅か十六歳の身であり乍ら、踏み留つて敵を防ぎ、健氣な打死をした爲めに、知盛は僅かに命をたすかつて、宗盛の船まで落ち延びましたが、さて宗盛に申すには、子が踏み留

つて敵を防ぐのに、親がそれを棄て、遁げると云ふやうな卑怯な事は、若しも他人がしたならば、我れは其人の面に唾すべし。然るに今は我身實に之を爲せり。人に合すべき面目もなしとて、男泣きに泣いたと申すことである。他人よりも妻子、妻子よりも我身、我身ほど大切なものはない。我身を修めて妻子に及ぼし、妻子を修めて他人に及ぼすのが、教育から云ふても、宗教から云ふても至當の順序である。即ち蓮如上人の御教訓の通りである。

六。然らば、如何に妻子を導いて、精神修養の途に進ませるのであるか、そこが他力信仰の難有い所である。如來の御慈悲を信じて、念佛させて貰ふ身の上は、我力ではないが、佛智の不思議として、闇黒の中に光りを見出し、悲哀の中に歡喜を見出し、苦

悶の中に感謝の光りを見出させて戴くことである。清澤先生は、

「我れ若し如來の御慈悲を信せず、我身の責任などを論するならば、百度び切腹するも、我が責任を塞ぐ能はず。されど如來の指導を信じたる身は、此の如き責任煩惱の苦痛を免れ、唯何事も如來の他力にまかせ奉つて、日送りする事の心安さよ」と、申されましたが、我力で闇黒を去るのではない、如來の光明が、苦惱の胸にさしこんで下さるから、自然に苦痛の闇が晴れて、平和の光りを見出すのである。自殺してのけたいと思ふほどの苦惱の中にも、一念、南無阿彌陀佛と唱ふれば、如來の御慈悲は、忽ち我等の心の中に湧き出で、かゝる悪人を、此機のなりでたすけ玉ふことの難有や、我等の如きあさましき生活の者も、常に如來の光

明にて護らせ玉ふことの勿體なやと、歡喜の光りが生ずるや否や
 今までの苦惱は、いつの間にか、跡をも留めず消へ去てしまふ。
 是が闇夜の提燈である。人生慰安の源泉である。しかし乍ら、水
 を飲んで、渴きが止まると云ふも止まらぬと云ふも、畢竟は口先
 の議論である。實際の處は、水を飲んで見ねば、其眞意は分らぬ
 のである。如來の御慈悲を信じて念佛すれば、人生の行路に慰安
 を得て、未來永劫の問題に、安心が出来ると云ふも出来ぬと云ふ
 も、畢竟は口先の議論である。つまるところは、我身が實地に之を信
 ずるに非ざれば、其眞意を會得することは出来ぬ。何故なれば、
 信仰上の事實は、言舌で定むべきものでなく、實地に經驗して知
 るべきものである。

七。紀貫之の歌に、「春の夜の、やみはあやなし梅の花、色こそ
 見ね香やはかくる」と申す歌があります。春の夜の闇は、あ
 や目も分かれやうに、四面闇黒に閉ぢられてある。此闇夜の中に
 於ては、たとひ咫尺の距離に近づいても、梅花の色が分るもので
 はない。しかし隠くすに隠されぬものは、梅花の清き香である。
 いかほど闇は深くとも、梅の香だけは、あり／＼と吾人の胸にし
 みこんで来る。然らば、闇夜に梅花を知らんと欲するものは、色
 を以て見ずに、我が心の上に感ずる香を以て知らねばならぬ。無
 明煩惱の闇夜に在て、如來の御慈悲に觸れんとする者は、手を以
 てすべきでなく、また眼を以てすべきでない、唯心の上に、如來
 の御慈悲を感じするのみである。是れが如來の御慈悲に觸るゝ唯

一の道である。さればこそ親鸞聖人は、信心爲本と仰せられ、唯心の上に、佛智の不思議を信じ、我等如きの悪人を、むづこたすけ玉ふが如來の御慈悲ぞと、深く信じて念佛するが、何よりも目出度き事ちやと御勸め下さる事である。我身が先づ此御慈悲を信じ、これを最愛の妻子に傳へ、共に御慈悲の中に日暮しするのが佛教信者の家庭生活である。しかし乍ら、若し人あつて、妻子に信せしめんがために、先づ我身が信せねばならぬと云ふ人あらば是は大に注意せねばならぬことである。それならば、我身が信する云ふ事が眞の問題でなく、單に妻子に對しての方便となつて居るから、そんな態度では、なか／＼御慈悲は信せられぬと思ふこれが前にも申す如く、古への學者は己れのためにす、今の學者

は人のためにすと云ふ意味合で、妻子のために、自分の信心を求めんとするのは、大なる誤りであります。實の處を云へば、妻子のためなど云ふよりも、我身が先づ御慈悲を信するならば、妻子には自然に及ぶものである。我身が信じて居らずして、いかほご妻子に勸めたごとて、決して其心の透るものではない。されば古への格言にも、「孝子とばしからず、永く爾の類をたまふ」とありまして、眞の親孝行者が一人出來れば、必らず夫に感化せられて同じやうな孝行人が出來るものである。信仰もそれと同じ事で、我身が先づ如來の御慈悲を信じて、人生波浪の渦まく中に、平和の生活をさせて貰ひ、淨土往生の身分と成て、念佛感謝の日暮りをするならば、一家の中は、必らず其感化を蒙むるものである